

柏原市文化財概報 1988-I

柏原市埋蔵文化財発掘調査概報

1988年度

1989年3月

柏原市教育委員会

はしがき

本年は、博覧会や催しが各地で行われ、沢山の人びとが参加した。これは、人びとの要望が多様となり色々の分野での活動も盛んであり、それぞれの地域の文化と産業を振興し繁栄を得るためである。

柏原市の文化財行政も今日のように変化の激しい時代に対応して、遺跡の調査によって文化財の保存を計る事や歴史資料館の開設に加え、遺跡の公有化と整備を行い市民の文化財の活用と憩いの場を提供する事を考え、その一環として高井田横穴群の史跡公園と歴史資料館の建設を予定している。

本年度も市内遺跡の発掘調査を実施して、各時期にわたる多くの成果を得てきた。これらは、今後何らかのかたちで地域文化の礎石として役立つものと確信する。なお、調査を実施するにあたり、多くの方々からご協力を頂き感謝すると共に市文化財の発展にご援助をお願いするものである。

1989年3月

柏原市教育委員会

教育長 庵刀和秀

例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が国事補助事業（総額6,000,000円、国補助率50%、府補助率25%、市負担率25%）として計画し、社会教育課文化係が実施した柏原市内遺跡群緊急発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、柏原市教育委員会社会教育課、竹下 賢、北野 重、安村俊史、桑野一幸を担当者とし、昭和63年4月1日に着手し、平成元年3月31日に終了した。
3. 本書は、文化財保護法第57条の2に基づく届出があった252件のうち、昭和63年1月1日から同年12月31日までに着手した、土木工事に伴う事前発掘調査の概要を記載している。
4. 調査の実施と整理にあたっては、下記諸氏の協力を得た。

松井隆彦 空山 茂 奥川滋敏 谷口京子 寺川 欽 蔡中優香 竹下彰子
津田美智子 伊藤芳匡 稲岡利彦 近藤康司 岡田嗣生 田中國雄 本多恵治
前田耕司 松井美保子 尾野知永子 南ゆう子 寺尾正美 青木久美子
乾 優世 奥野 清 谷口鉄治 井上岩次郎 吉村啓治 浜木一二 鈴木 勝
田戸岩一 堀 一之 乃一敏恵 横関勢津子 吉居豊子 村口ゆき子 竹下真紀

5. 本書の執筆は北野が担当した。
6. 本書で使用した原稿と方位は、特に注記のない限りT. P.、磁北である。
7. 本調査に際して、写真、実測図を記録として残すと共に、カラースライドを作製した。また、出土遺物は、写真、実測図と共に当教育委員会、歴史資料館にて保管、展示を行っている。広く利用されることを願うものである。

目 次

は し が き

例 言

目 次

1988年度柏原市内遺跡群発掘調査一覧

1988年度柏原市内遺跡群立会調査一覧

第 1 章 大県南遺跡.....	1
88- 3 次調査.....	1
第 2 章 安堂遺跡.....	6
88- 2 次調査.....	7
第 3 章 平尾山古墳群.....	9
88- 1 次調査.....	10
88- 6 次調査.....	11
第 4 章 玉手山遺跡.....	14
88- 1 次調査.....	15
88- 3 次調査.....	21
88- 8 次調査.....	24
第 5 章 田辺遺跡.....	25
88- 1 次調査.....	26
88- 2 次調査.....	28
88- 4 次調査.....	30
第 6 章 国分尼寺跡.....	32
88- 2 次調査.....	32

1988年度 柏原市内遺跡群発掘調査一覧

遺跡名	所在地	面積m ²	申請者	用途	担当	調査期日	備考
国分尼寺88-1	国分東条町2013-2の一部	112.58	松浦 宗	個人住宅建設	北野	2-4-2-5	5×5 mのトレンチを設定し地表下1.5mで奈良時代の遺物を含む土を確認した。
田辺城尾	国分本町7丁目893-1	714.96	西村博文	共同住宅建設	北野	2-16	2×4 mのトレンチを設定し地表下2.5mまで掘削したが遺構・遺物なし。
田辺88-1	田辺2丁目5-9	1063.76	増田晴久	個人住宅建設	北野	2-17-2-20	本井指揮
田辺88-2	田辺2丁目1331-10	158.61	大谷ホーム㈱代山土佐一	個人住宅建設	北野	2-19-3-5	本井指揮
安堂城尾	安堂町962-1、-2地2筆	950.00	中辻繁太郎	共同住宅建設	北野	3-3	2×3 mのトレンチを設定し地表下3.5mまで掘削したが遺構・遺物なし。
玉手山88-1	玉手町145-8	1195.00	長谷川 達	共同住宅建設	北野	3-4-3-28	本井指揮
玉手山88-2	円町3-5	232.00	西西セルフ-06代青戸元也	無線放送設置	北野	3-14-3-19	2×2.5 mのトレンチを設定し地表下2.5mまで掘削し、古墳時代から中世までの遺物が若干出土。
大塔山88-1	大塔4丁目381-1	216.38	山谷義典	個人住宅建設	北野	3-14-3-19	2×2.5 mのトレンチを設定し地表下2.5mまで掘削し、吉須賀氏後期から奈良時代の遺物含む土を地表下約1 mで確認した。
平尾山古墳群88-1	大塔4丁目431他1筆	498.71	岡本春晴	個人住宅建設	北野	4-19-4-23	本井指揮
玉手山88-3	片山町222-2	207.99	西道秀介	個人住宅建設	北野	5-9-5-10	本井指揮
田辺88-3	田辺2丁目1314-1	500.00	三浦恵子	掘壁工事	北野	5-17-5-19	2×4 mのトレンチを設定し奈良時代の遺物が少量化確認していたのを確認した。
玉手山88-4	堀ヶ丘2丁目315-112	138.96	木澤信雄	個人住宅建設	北野	5-27-6-13	2×4 mのトレンチを設定し下の遺物が出土したが既に削平を受けている。
太平寺88-2	太平寺2丁目147-1	1769.45	森野ナラニ・智代	共同住宅建設	北野	5-30-6-14	348 m ² を調査。知禮寺関連の遺物と溝跡を検出した。
平尾山古墳群88-3	安堂町1026-4番地他1筆	400.00	山西敏一	農地被覆	北野	6-7-10-31	120 m ² 調査。縦穴式石室1基、横穴式6基、中世の古墓多數検出。
安堂88-1	安堂町731-1-1	873.307	小林道広	分譲住宅建設	北野	6-13-6-14	事前着工、進捗部分を調査したがほとんど前半を受け損なった。
平尾山古墳群88-4	安堂町590、591-1	582.90	森林増雄	個人住宅建設	北野	6-17-6-21	2×7 mのトレンチを設定し中世期以降の厚い堆積土を確認した。
玉手山88-5	片山町1-3	994.50	戸羽栄介	共同住宅建設	安村	7-4	4×4 mのトレンチを設定し白鳳川の氾濫堤であることを確認した。
田辺88-4	国分本町7丁目1965-16	165.30	青山 祐	個人住宅建設	北野	7-4-7-9	本井指揮
安堂88-2	安堂町917	193.75	安尾 三油	個人住宅建設	北野	7-11-7-18	本井指揮
田辺88-5	国分本町6丁目1-3	145.36	高崎 弘	個人住宅建設	北野	7-12-7-13	2×5 mのトレンチを設定し地表下1 mで吉須賀氏から奈良時代にかけての遺物が少量化。
扇山88-1	堀ヶ丘3丁目4758	1771.60	玉手山学園理事長 江藤文介	アーチ埋設	安村	7-25-8-17	約150 m ² 調査。6-8世紀の集落関係の遺構と遺物等を多數検出。
法善寺南寺88-1	法善寺3丁目445-3、446-3	312.0	花房俊輔	古床検出	安村	7-20	2×3 mのトレンチを設定し地表下1 mで吉須賀氏から奈良時代にかけての遺物が少量化。
玉手山88-6	玉手町384-7	329.07	八幸産業㈱ 倉東部正巳	個人住宅建設	安村	8-1	2×4 mのトレンチを設定し遺構・遺物なし。
太平寺南寺88-1	太平寺2丁目154-1、5 155-3、4	277.48	川野 弘・弘二	個人住宅建設	北野	8-2-8-4	2×3 mのトレンチを設定し地表下2 mまで掘削したが、遺構・遺物なし。
玉手山88-7	円町217-29	1163.18	ビーバー・ハウス	寺院新築工事	安村		2×5 mのトレンチを設定し3.5 mまで掘削したが、4倍で盛土である。
玉手山88-8	堀ヶ丘1丁目247-8	582.90	藤井静光	個人住宅建設	北野	8-9-8-11	本井指揮

遺跡名	所在地	面積ha	申請者	用途	担当	調査期日	備考
田辺88-6	山辺2丁目4570-1他2番	1613.0	山西敏一	グランド造成	安村	8-15	2×2.5mのトレンチ設定し 造構・造物なし。
安堂88-3	太平寺1丁目130-1外	4,561.75	代官町孝夫	事務所建築	北野	8-22~8-31	新発見遺跡で飛鳥時代の墓 群を確認した。
平尾山遺跡88-5	根多屋町2722	10,731.0	平石清	農園造成	安村	8-29	3×3mのトレンチ設定し 造構・造物なし。
国分尼寺跡88-2	国分東条町2567-2	238.91	山田治男	個人住宅建設	北野	9-1~9-2	古書挑査
麻山88-2	越ヶ丘3丁目7	382.46	岡田典子	個人住宅建設	北野	9-6~9-7	2×4mのトレンチ設定し 造構・造物なし。
大坂南88-2	大畠4丁目244-1, 245-2	633.47	古村正義	分譲住宅建設	安村	10-7~10-8	2×4mのトレンチ設定し 古墳時代中期の遺物少量出土。 ほとんどが覆瓦きれいで いる。
本郷88-1	木暮3丁目47-3無4筆	1,690.53	大阪トヨタ自動車㈱ 内山部正巳	自動車展示場	安村	10-11	2×4mのトレンチ設定し 地表下3mで遺物包装帯を 検出した。
安曇方塚六種88-1	五手町145-3, 314, 315-2	194.48	山西敏一	コミュニティ会館建設	安村	10-11~10-27	90m ² を測定。未完成穴1 基を確認。古墳時代～近世 の遺物出土。
田辺88-7	国分木町6丁目205	193.98	堅木根久	個人住宅建設	北野	11-1~11-7	4×4mのトレンチ設定し 近世の遺物少量出土。
玉手山3分塚88-1	越ヶ丘1丁目9番50号	4,864.00	山西敏一	歴史的遺跡復元	安村	11-7~11-16	地形測量、3×30mのトレ ンチを造営部に設定し、基 石を確認。頂部を研磨検 査、土工作の新説確認。
田辺88-8	国分木町7丁目1~20	14,605.0	山西敏一	クラブハウス建設	北野	11-16	2×2.5mのトレンチ設定し 近世の遺物少量出土。
田辺88-9	国分木町5丁目1516	886.02	辻野裕旗	個人住宅建設	北野	11-15~12-16	4×4mのトレンチ設定し 近世の遺物少量出土。 近世の遺物少量出土。 土層によってほとんど變化 する。
大鷲南88-3	大畠4丁目388	344.33	上山	分譲住宅建設	北野	12-17~12-28	古書挑査
高井田88-3	市原町79番及び 大字高井山155番	19,125.03	柏原市開発公社	保養センター建設	安村	88-7-21~88-6-23	高坂寺を建設した古代右力 氏の集落と考えられる。 建物群を100棟以上持つ。

1988年度 柏原市内遺跡群立会調査一覧

遺跡名	所在地	面積ha	申請者	用途	担当	調査期日	備考
玉手山	円明町409の一部	249.97	佐中逸男	個人住宅建設	北野	5-10	62.3~65 造構・造物なし。
田辺	田辺2丁目2103-6, 9	209.80	寺住好季	個人住宅建設	北野	8-2	63.3~2 造構・造物なし。
玉手山	円明町111-2	117.669	大阪市教育委 教育長 塚谷敏大	会館建設	安村	8-30	63.3~11 造構・造物なし。
田辺	田辺2丁目2103-14	253.24	西脇豊子	個人住宅建設	安村	9-12	63.3~8 造構・造物なし。
大草	平野1丁目65-4	154.7	神リビングコーポ 代表取締役	店舗	安村	10-3	63.3~17 造構・造物なし。
玉手山	越ヶ丘1丁目464-25	165.29	中島清	個人住宅建設	安村	10-28	63.3~16 造構・造物なし。
太平寺	太平寺2丁目365-1	809.00	中野信一	個人住宅建設	安村	11-5	62.3~42 造構・造物なし。
高井田横六	大字高井田273	669.58	谷口一	個人住宅建設	北野	1-26	61.3~40 造構・造物なし。
本郷	本郷1丁目3-20	542.51	山光興産㈱ 大阪支店 支配人 松尾政男	船泊	石川	2-6	62.3~38 造構・造物なし。
田辺	田辺2丁目1231-22	74.12	和田晃次	個人住宅建設	北野	2-10	63.3~45 造構・造物なし。
玉手山	越ヶ丘1丁目449-23, 13	194.97	大西新二	個人住宅建設	北野	2-26	62.3~2 造構・造物なし。

この一覧表には昭和63年度国庫補助事業として計画、実施した発掘調査のうち、昭和63年度1月1日~12月31日の間に着手したものを持載している。

第1章 大 県 南 遺 跡



図-1 大県南遺跡調査位置図

88-3次調査

- ・調査地区所在地 大県4丁目382
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 1988年12月17日～12月28日
- ・調査面積 25m²／93.33m²

当調査区は、生駒山地西麓部の緩斜面地である。直ぐ東側の山地と平野の傾斜変換点付近には、大県南廃寺（山下寺）が在る。山下寺は、出土した軒瓦をみる限り飛鳥時代創建と考えられ、その周辺には多くの同時期の集落を形成している。

調査は、東西方向5.5m、南北方向5.5mのトレンチを設定して実施した。層序は、上層から、耕作土（1層）、灰色砂質土（2層）、灰茶色砂質土（3層）、茶褐色粘質土（4層）、暗茶褐色粘質土（5層）、黄茶灰色粘質土（8層）がある。2層は、耕作土の床土とみられ、深浅の差

があって均一的ではなく、10~50cmの厚さがある。3層は、中世の遺物包含層で遺構は検出しなかったが、土師器、瓦器等が少量出土した。4層は、厚さ約30cmの土師器、須恵器、輪羽口、鉄滓等を含む遺物包含層である。同土層除去後に、西側端で土括状の落ち込みの一部を検出した。埋土中には土器の他、人頭大の礫が多く含まれている。瓦の破片もこの土層から出土している。5層は、4層と同様であるが、やや砂質土に近い。4層が南北方向にほぼ水平に堆積しているのに対し、5層は自然の地形に則して堆積している。厚さは、30~50cmである。遺物は、土師器、須恵器等が出土した。

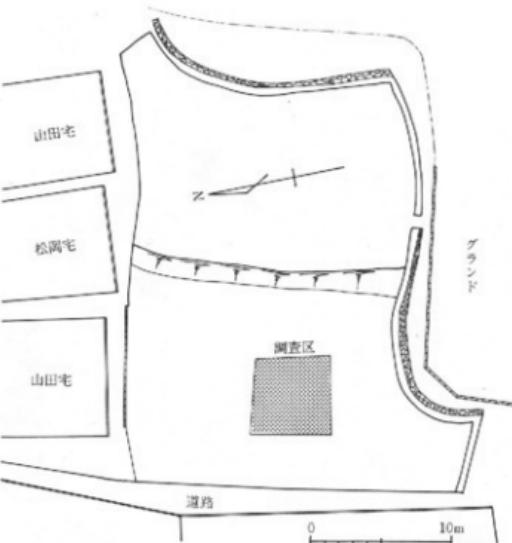


図-2 調査区位置図

同土層除去後に、ピット4、溝1を検出した。ピット1は、50×52cm、柱穴径22cm、深さ24cmである。ピット2は、40×56cm、柱穴径17cm、深さ14cmである。調査範囲が狹少なため建物の全体規模は明確でない。ピット1、2間の距離は、2.1mを測る。方位はW-13°C-Nである。他に不定形のピットを検出したが、どのような性格のものか明らかでない。溝1は、南から北へ下がる溝で、長さ5m以上、幅約1m、深さ40~50cmである。埋土は、上層が薄茶褐色粘質土、下層が灰褐色砂質土である。掘方断面は、逆台形である。土師器、須恵器の細片が出土したが、時期は明確でない。8層は、黄茶灰色粘質土である。厚さは、20~30cmである。弥生時代の遺物包含層である。弥生土器とサヌカイト剝片が出土した。

出土遺物（図-5、6）

出土遺物は、コンテナ11箱出した。弥生土器、須恵器、土師器、輪羽口、鉄滓、製塩土器、サヌカイト剝片、獸骨等がある。

弥生土器

図化していないが、弥生時代中期の甕が出土している。この時代の集落は、西側下方に中心部があると考えられ、当地區は、その東側縁辺部であろう。

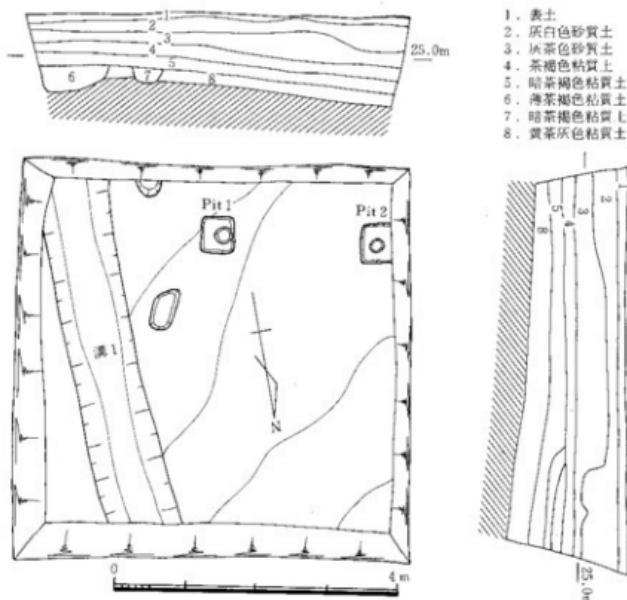


図-3 平面図・断面図

須恵器 (図-5)

器種は、杯蓋身が圧倒的に多く、壺、甕、鉢等がある。1は、わずかにかえりが遺存する蓋で、擬宝珠様つまみが付く。2、3は、口径11~12cmの蓋で、口縁端部は丸くおわり、肩部には沈線や段が見られない。天井は、ヘラ切り未調整である。4、5は、天井を回転ヘラ削りを行い、肩部に明瞭な段がある。6は、天井部に×印のヘラ記号がある。8は、天井部に×印の朱書がある。朱書が意味するものは、消費地における所有者の別又は使用用途の別で分けられたものであろう。

9~18は、杯蓋である。9~11は、口径が10cm未満のものでたちあがりが受部と同じ位の大きさのものである。9の底部がヘラ切り未調整である他回転ヘラ削りである。13の底部に×印と考えられるヘラ記号がある。14~18は、口径13.4~15.6cmを測り、たちあがりが小さく伸びている。口縁端部は、内傾する平面か段が認められるものが多い。19は、バケツ形の鉢である。体部に3本の沈線がある。中央部付近に把手の取れた痕跡がある。20は、口縁端部が大きく外反する甕で外側に2本の凸線が巡る。21は、短く上方に伸

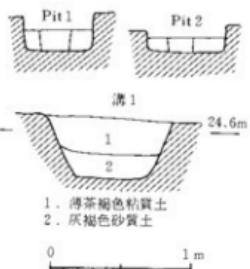


図-4 遺構断面図

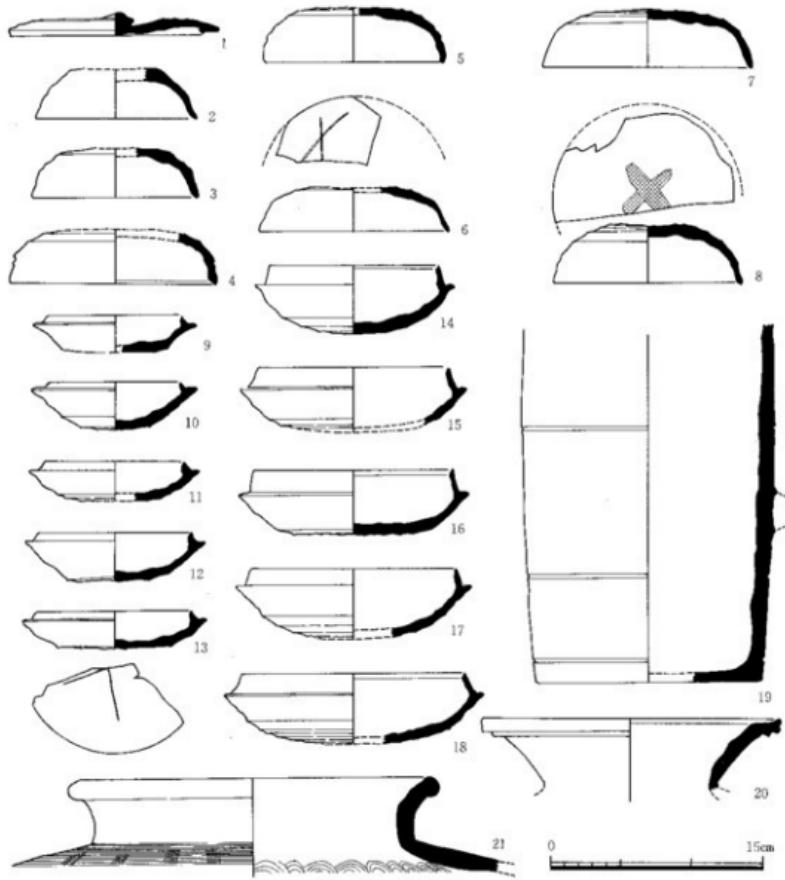


図-5 出土遺物

びた後外反して端部が丸く肥厚する變である。体部は、外面にカキ目調整、内面は同心円文叩きがある。

土師器は、小皿、杯、高杯、鉢、壺等が出上した。1は、口縁端部をヨコナデして段を付けた小皿である。色調は、灰茶色で、胎土は、石英や長石、金雲母等を含む。時期は、中世のものと考えられ、瓦器の出土も少量みられた。2、3は、小型の杯である。2は、内面を板ナデ、外面は指押さえ痕があり、粘土の離目痕がある。3は、内面に放射状暗文があり、外面はヘラ磨きを行っている。4～6は、中大形の杯である。内面に放射状暗文を施し、6は、2段になっている。6の外面はヘラ磨きがあり、5、6の底部はヘラ削りを行っている。7は、

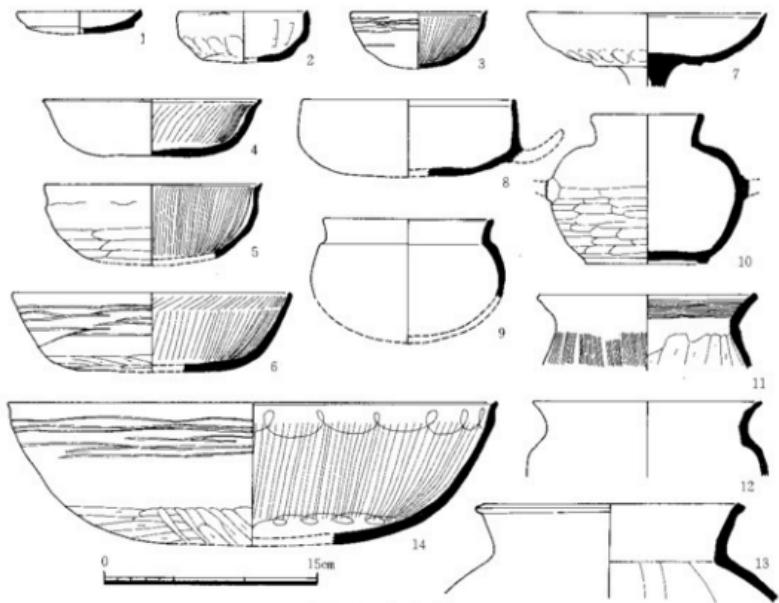


図-6 出土遺物

杯部と脚部の境に明瞭な段を持つものである。8は、把手付鉢である。口縁部内側にわずかに沈線が巡る。10は、把手付壺である。口縁部は短くたちあがり、肩部と体部はよく張って偏平な感じがする。体部の外面下部は、ヘラ削りを行っている。11~13は、壺である。11の壺は、外面をハケ目調整、内面を口縁部付近ハケ目と体部をヘラ削りを行っている。12は、体部外面が磨耗しているが内面はヨコナデである。13は、体部内面が板ナデ以外ヨコナデである。14は、大型の鉢である。内面には放射状暗文と口縁部と底部にラセン暗文が施されている。外面にはへう磨きと底部をヘラ削りしている。

その他の遺物として、繩羽口が4点出土した。器形のわかるものは1点ある。現存長10.2cm 内径2.6cm、外径6.3cmの筒型である。先端部には溶融した金属が付着している。鉄滓は3点出土した。最も大きいもの7.0×7.7cm、313gを測る。出土総重量は、506gである。

製壺上器が8点出土した。それぞれ細片で岡化しえなかったが、杯型のものと鉢型のものがある。前者は、2~3mmの厚さで、後者は、5~7mmの厚さのものである。

古墳時代後期に属する遺物は、6世紀後半から7世紀前半に至るものである。鍛冶関係の遺物も同一土層から出土しており、当調査区においても鐵器生産に従事した工人が居住していた事が判明した。

第2章 安 堂 遺 跡

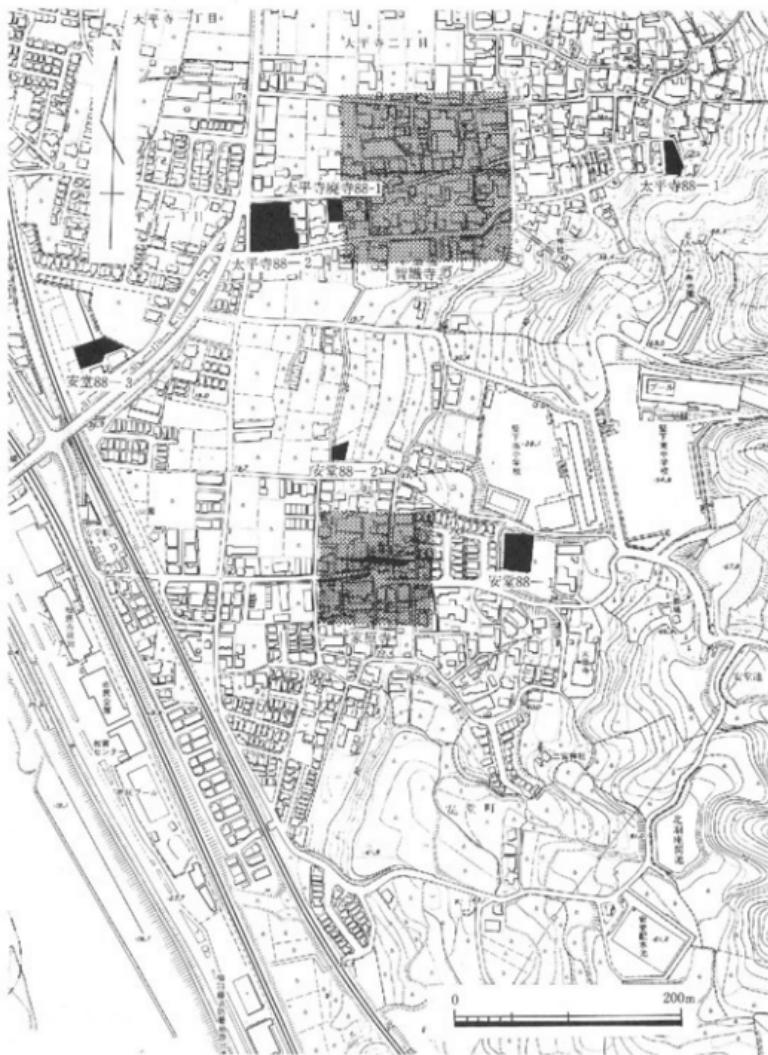


図-7 調査地位置図

88-2 次調査

- ・調査地区所在地 柏原市安堂町917
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 1988年7月11日～7月18日
- ・調査面積 18m²／193.7m²

当調査区は、河内六大寺の1つ家原寺の推定地の北側部にあたる。また、近年の調査によつて、当地区的西側一帯が知識寺南行宮に関わる遺構と遺物を検出しており、今後注目される地域である。今回の調査は、個人住宅建設に伴う事前の調査として実施したものである。

調査区内に3.2×5mのトレンチを設定した。層序は、表土（1層）、茶灰色砂質土（2層）、灰茶色粘質土（3層）、灰褐色砂質土（4層）、黄灰色砂質土（5層）、薄茶青灰色粘質土（6層）、青灰色砂土（7層）、暗青灰色砂礫土（8層）である。1、2層は、ぶどう畑の耕作土である。4、5層が中世の時期の遺物包含層である。5層は、割合堅く締まった土層で上面がこの時期の遺構面が考えられる。トレンチ内では遺構の痕跡が見い出せなかった。7層は、川又は谷筋部の水の流れによって堆積した砂層である。遺物はほとんど含まれない。8層は、植物遺体の腐食したビート層及び青灰色粘質土、青灰色シルトの土層が5～10cmの厚さで堆積している。この土層には、須恵器や土師器の他流木もみられた。深さ約1.8mまで掘削したが湧水が激しくより下層の掘削を終えた。この溝は、谷筋部の延長線上にあたり少なくとも中世の頃には埋没して扇状地となっている。

遺物は、中世と古墳時代後期から奈良時代頃まで及び弥生時代の3時期が認められた。中世の時期の遺物に、瓦器（1～3）がある。1は、小皿である。口縁部はヨコナデを施し内側に屈曲させている。内面は、格子暗文があり、あまり密でないヘラ磨きがみられる。2は、完形に近いもので、内面は、格子の暗文と割合密なヘラ磨きがある。外面は、体部上半に荒いヘラ磨きがみられる。仕上げは丁寧である。3は、口縁の内面に1本の沈線があり、体部外面は、ヘラ削りを行った後3ないし4分割の密なヘラ磨きを施す。内面にも密なヘラ磨きがある。

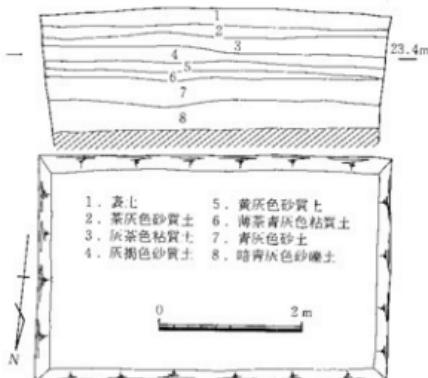


図-8 トレンチ平面図・断面図

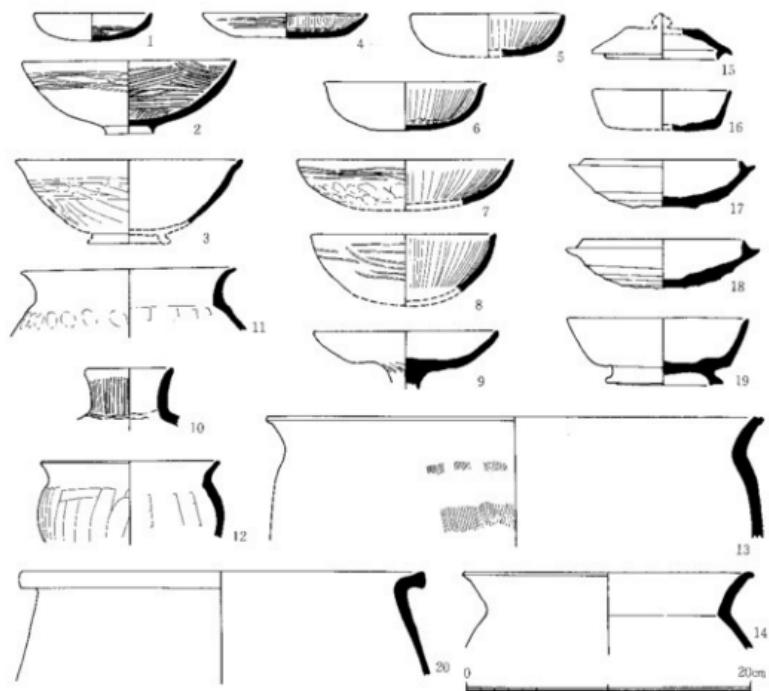


図-9 出土遺物

古墳時代から奈良時代の遺物は、土師器と須恵器がある。土師器は、杯、高杯、壺、甕がある。杯（4～8）は、口縁端部が肥厚して丸く終わるものと小さく外反して尖り気味に終わるものがある。4と6の内面にラセン暗文があり、また、放射状暗文はすべてのものにみられる。4、7、8の外面にヘラ磨きがある。高杯（9）は、杯部と脚部の接合部に段が見当たらない。短頸壺（10）は内外面にヘラ磨きがみられる。体部外面はヘラ削りで、内面は板ナデ調整である。甕（11～14）は、口縁部が大きく外反して端部が水平方向に小さく伸びている。外面は、指押さえした後にナデ調整している。13は、部分的にハケ目が残る。須恵器は、杯と甕が出土したが、実測したのは杯だけである。杯の蓋（15）は、かえりが付くものと擬宝珠つまみが付くものがある。身（16～19）は、かえりが付くものと付かないものがあり、後者は平底と高台が付くものがある。

弥生時代の土器は、中期の甕（20）がある。当調査区の西側へ数十mの場所で同時期の遺構と遺物が検出されており、集落の縁辺部となるかもしれない。

第3章 平尾山古墳群



図-10 平尾山古墳群調査地位置図

88-1 次調査

・調査地区所在地

・柏原市大槻4丁目431他

・調査担当者 北野 重

・調査期間

1988年4月19日～4月23日

・調査面積

16m²/498.7m²

当調査は、個人住宅建築に伴う

事前の緊急発掘調査として実施し

たものである。

当地域は、生駒山地の西麓部の

勾配の急な斜面地にあるが、1982年から実施した農道建設に伴う調査で古墳時代後期かに奈良時代までの遺構と遺物が確認されている。

第1トレンチは、1.8×2.5mの大きさで小尾根筋に設定した。層位は、表土（1層）、灰茶色粘質土（2層）、灰茶褐色粘質土（3層）、茶灰褐色粘質土（4層）が現地表面にほぼ平行して堆積している。各土層とも花崗岩のバイラン土が多く含まれており、耕作地開墾に伴う土層と考えられる。最下層に掘り溝が確認されたが、古い時期まで遡りえないものである。各土層から中世の時期の土師器片が少量出土している。

第2トレンチは、1.6×4.3mの範囲を約1.3mまで掘削した。場所は、農道建設時山下寺関連の瓦積遺構やピット群が検出された斜面上方にあたる。層位は、表土（1層）、黄灰色粘質土（2層）、茶黄色砂礫土（3層）、緑灰色シルト（4層）、灰茶色砂質土（5層）、薄茶灰褐色粘質土（6層）である。トレンチ東側は、わずかに平坦面があり、西側端から急に下方へ落ち込んでいる。各土層とも第1トレンチと同様中世期の土師器片が出土したが後世の耕作に関わる土層と考えられる。

第3トレンチは、第1トレンチの西側尾根下方へ設定した。規模は、1.5×3.0mを測る。層位は、第1トレンチと同様である。遺構と遺物は検出されなかった。

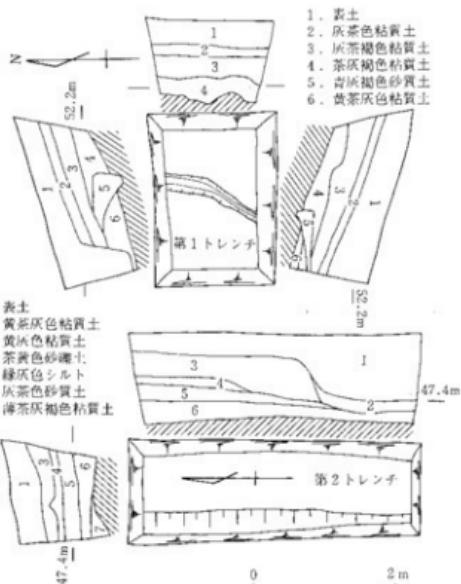


図-11 第1、3トレンチ平面図・断面図

88-6次調査

- ・調査地区所在地 柏原市高井出1101他2筆
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 1988年12月12日～1989年3月30日
- ・調査面積 50m² / 3,597,0m²

当調査区は、平尾山古墳群の平尾山支群第13支群である。柏原市在住の市民から当支群の古墳が盗掘されているとの通報が当教育委員会に寄せられ、その現状把握と保存措置を講ずる為の資料作製を目的として実施した調査である。場所は、平尾山支群の西南部の小尾根上で、直ぐ眼下の谷川を挟んで向かいの山筋に津越橋がある。

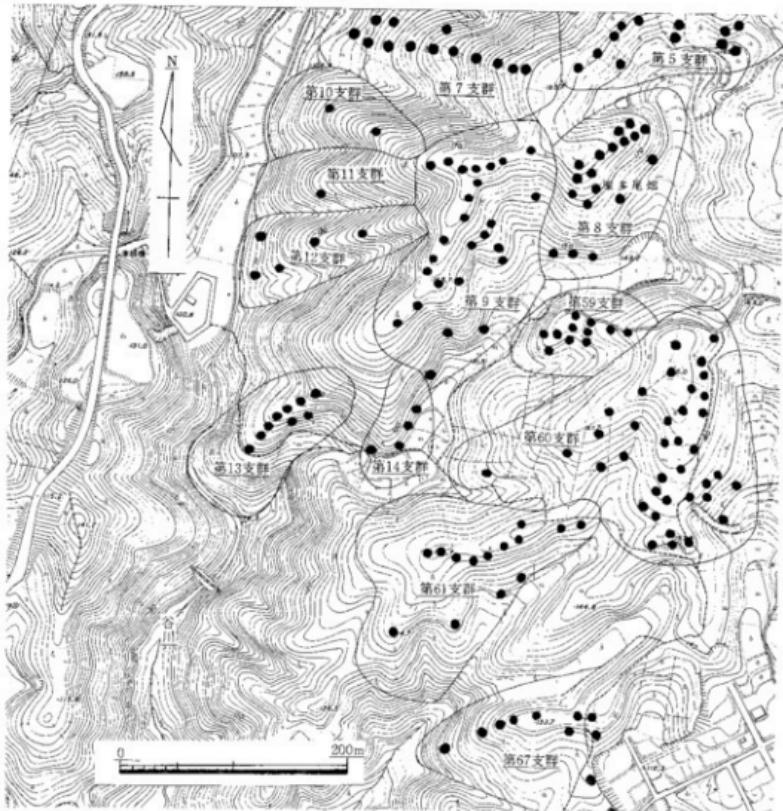


図-12 調査地周辺古墳分布図

調査は、土地所有者の許可を得て地形測量及び石室の実測を実施した。

古墳は、尾根筋に7基（標高の高い位置の古墳から1～7号墳）とその南側の斜面地に2基（東側から8、9号墳）の計9基がある。

古墳全体の遺存状態は大変良く、後世の人為的な破壊は認められず、築造時の形態をそのまま遺している。特に1～6号墳は、その封土や石室内部が一部石材の崩れや割れ等生じているが大きな変化は認められずほぼ定形に近い状態である。7号墳のみ天井石がすべて取り去られ側壁が露頭している。

8、9号墳は、わずかに石材がみられるがほぼ完全に埋没した状態である。

今回盗掘を受けた古墳は、1、4、6号墳である。1号墳は、昭和49年に行われた大阪府教育委員会の調査では、横穴式石室として取り扱われ、石室内はほとんど自然埋没していた。盗掘は、床面までほとんど掘り起こして石室埋土は羨道部にあたる位置に積み上げられていた。また、閉塞に使用されたと考えられる人頭大の割石も多数取り除かれていた。石室形態は、割石を使用した横口式石槨である。遺物は掘り起こされた釘が数本出土したのみで土器類の出土は破片すらなかった。石槨部の石材の崩れが進行して危険な状態を呈し、少なくとも盗掘による悪影響が出始めている。

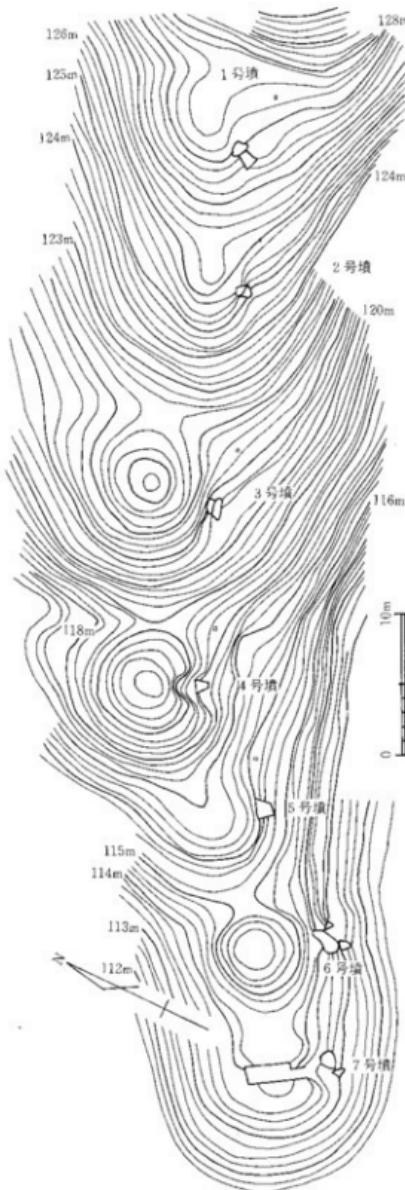


図-13 平尾山第13支群地形測量図

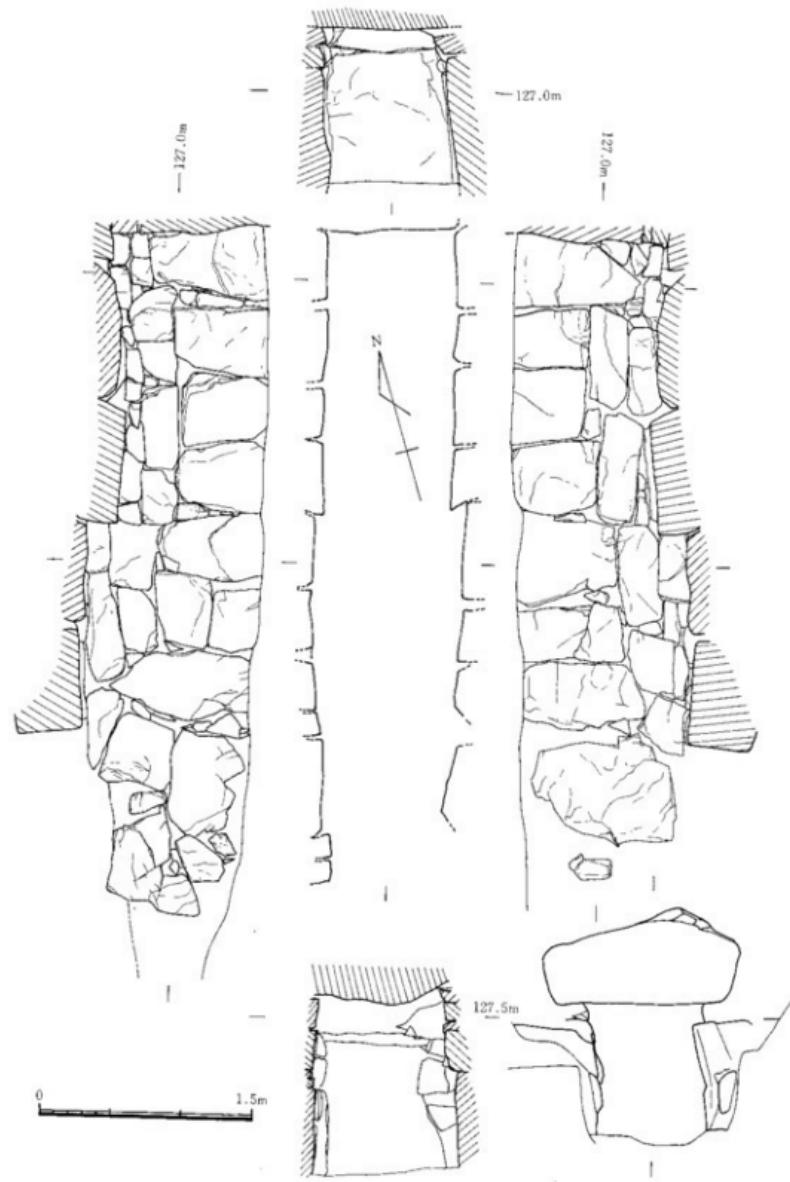


図-14 平尾山第13支群1号墳石室実測図

第4章 玉手山遺跡

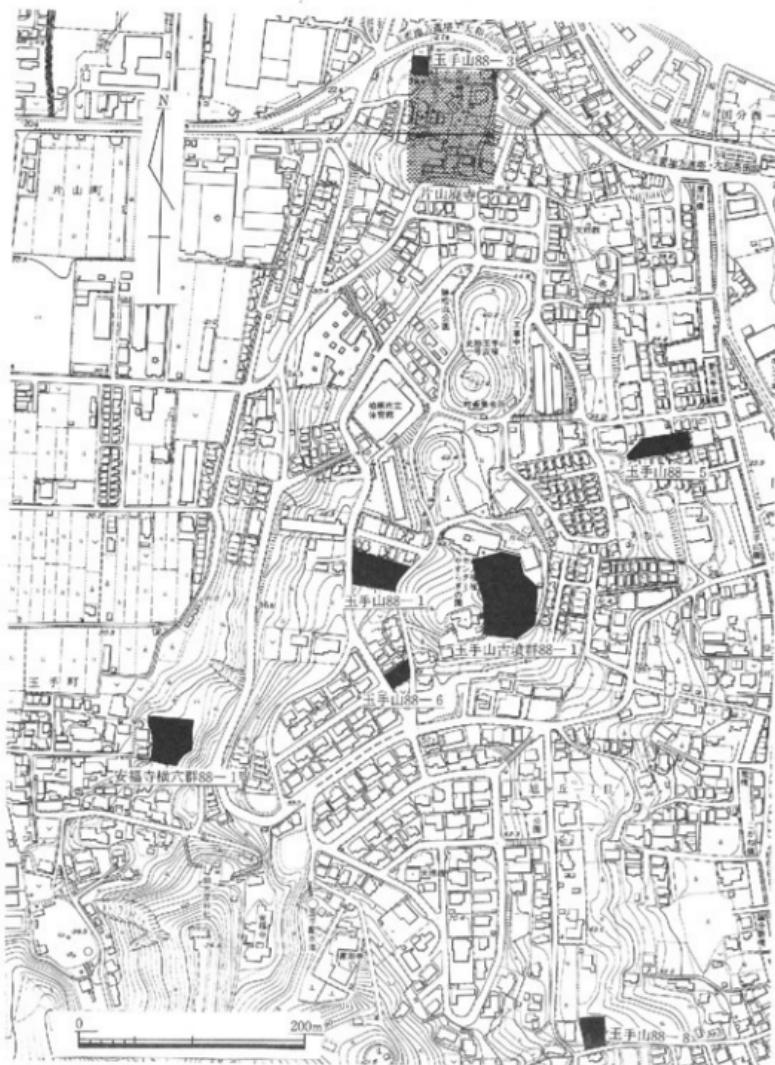


図-15 調査地位置図

88-1次調査

- ・調査地区所在地 柏原市玉手町145-8
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 1988年3月4日～3月28日
- ・調査面積 60m² / 1195m²

当調査区は、安福寺前に置かれている割竹形石棺の蓋石が出土したと云われる玉手山3号墳の直ぐ西側の斜面地にあたる。当地区より南側一帯は、昭和34年頃に宅地造成が成された後に販売された区域である。集合住宅建設に伴う事前の試掘調査である。申請者と協議したことによると、過去に建築計画があり、大阪府教育委員会が試掘調査を実施し、遺跡の有無を確認しているとのことであった。しかし数年が経過しており、計画内容も変更があるので、再度試掘調査を実施して対応することになった。



図-16 調査区位置図

第1トレンチ

第1トレンチは、斜面に添って横幅1.5m、長さ15.5mの規模である。層序は、黒灰色砂質土(1層)、茶褐色粘質土(2層)、灰褐色粘質土(3層)、黒褐色粘土質土(4層)、茶黃灰色粘質土(5層)からなる。1～3層は、造成及び最近に盛土をした土層である。出土遺物は近年のゴミ等があるのみである。厚さは、上方で30cm、下方で90cmを測る。4層は、盛土下の旧表土を含む土層で、厚さ15～50cm認められる。畑の耕作土として使用されていたと考えられ出土遺物は細片のものがほとんどである。遺物は、古墳時代から中世に至るまでのものが出土地した。5層は、厚さ約10cm位の遺物包含層である。この土層上面から切り込んだ火葬墓が7基以上確認された。

1号墓

第1トレンチの東側端から約7.5mの位置で検出した火葬墓である。最上部が標高61.5mである。遺構上方はほとんど削平されているが、径約40cmの土塙に土師器杯(12)と甕(19)が埋められていた。杯は土塙底部に正當位に置き甕を裏返しに被せていた。骨の遺存はなかった。

2号墓

1号墓の西側約1.2mの場所から検出された火葬墓である。検出規模は、東西及び南北方向25cmの円形土塙である。深さは、20cm強を測る。中央部に須恵器壺(26)を置き、その上に土

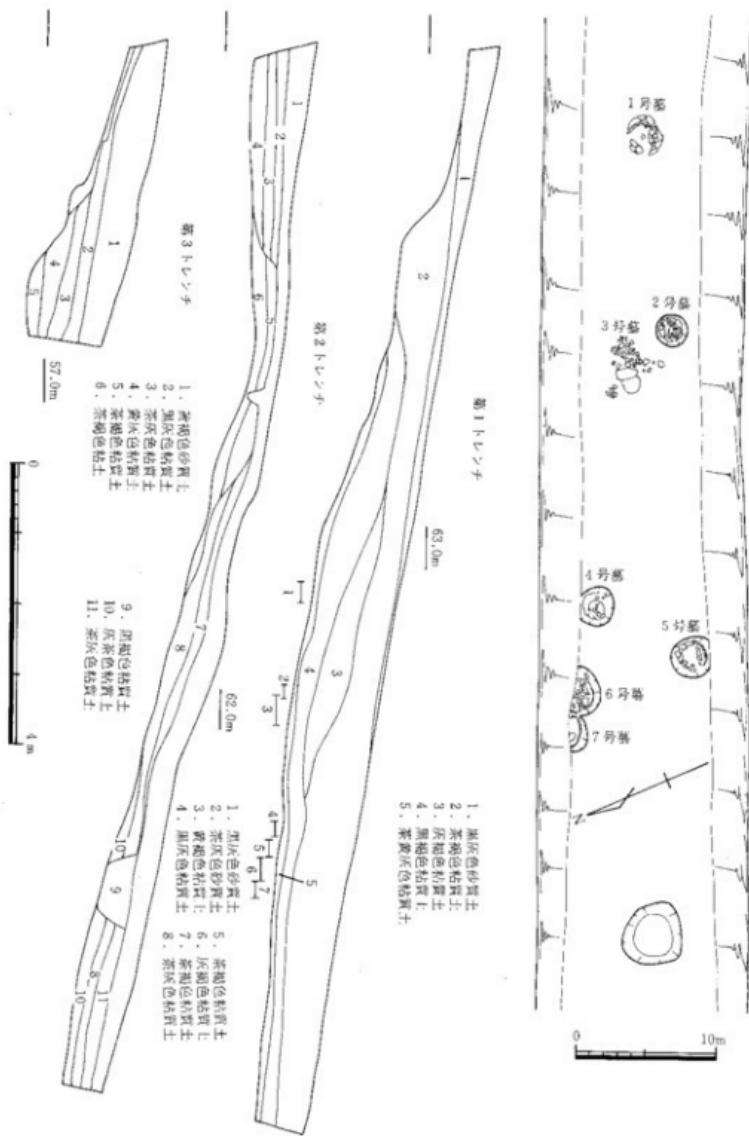


図-17 第1トレンチ造構図・第1～3トレンチ断面図

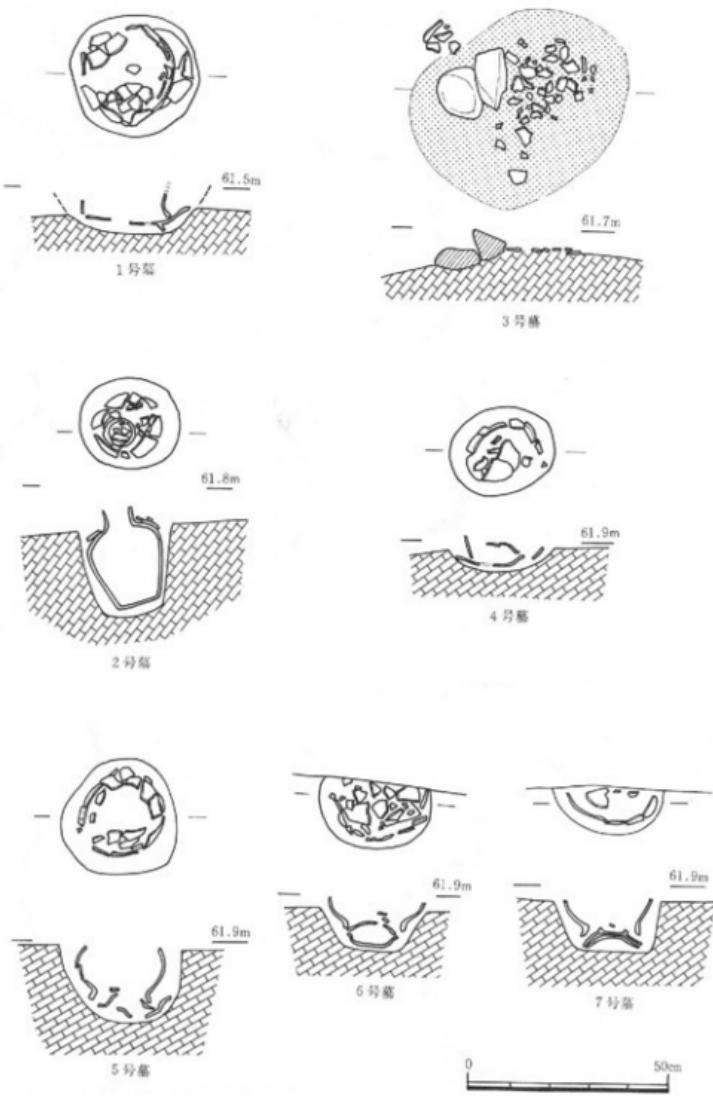


図-18 第1～7号火葬墓平面図・断面図

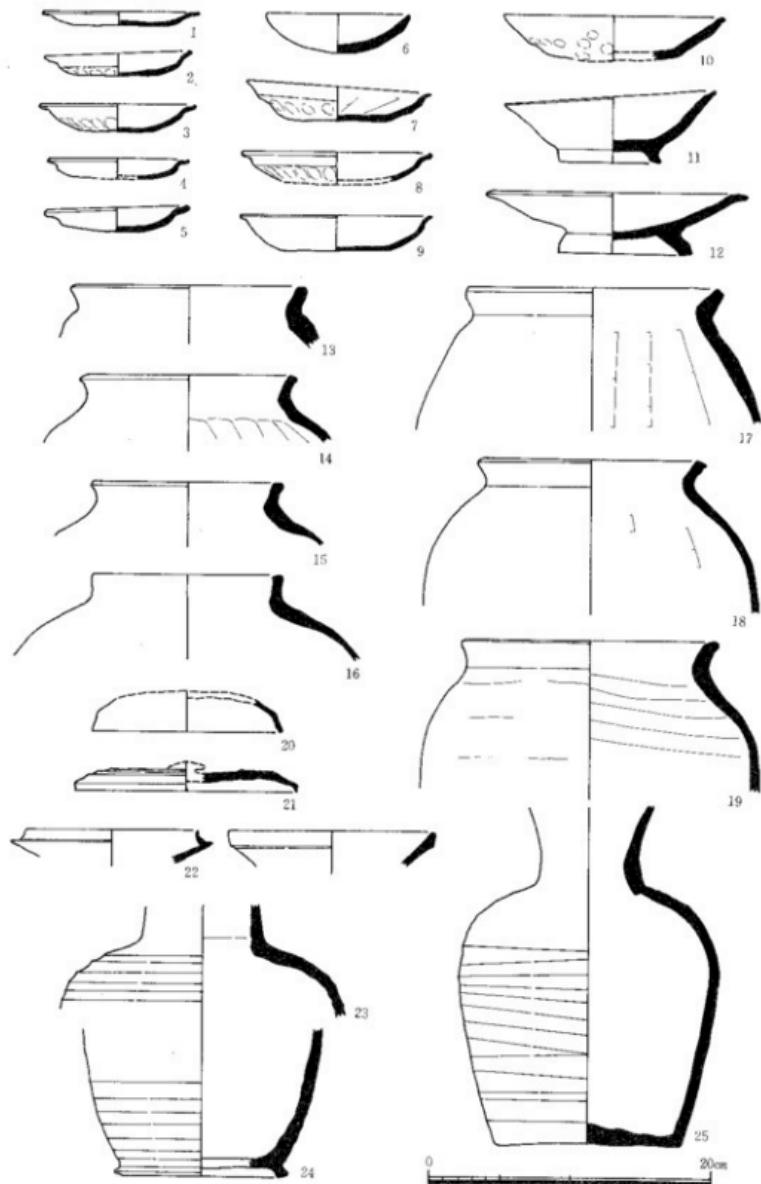


図-19 出土遺物

師器杯（10）を裏側にして被せていた。壺の口縁部が欠落しているが、埋納時か後世の擾乱によるものか不明である。壺の内部から火葬された人骨が出土した。

3号墓

2号墓の北西部直ぐ横から検出した火葬墓である。遺存が悪く後世の擾乱等によって土器類は細かく破粹されている。遺物は、須恵器の壺（25）底部と土師器の小皿（5）、杯（6）がある。それぞれどのように埋葬されていたのか不明である。土器片の西側には径15cm位の自然石が2石確認された。また、土器及び石の周囲50cmの範囲内には炭の混入が目立った。

4号墓

2、3号のさらに西側1.5m付近で検出した火葬墓である。東西26cm、南北23cmの済円形掘形に土師器壺と小皿（2）、大皿（9）が納置されていた。壺は、体部径が20～25cm位が想定されるもので、底部だけが遺存していた。大小皿は、壺内に入っていたものか蓋としていたのかは不明である。小皿の下から小量の人骨が出土した。

5号墓

径約30cmの円形掘方内に土師器の壺（18）と小大皿（4、8）が納置された火葬墓である。4号墓の南西50cmの場所にあたる。ピット底部は、検出面より20cmを測る。底部に大皿を置きその上に小皿を裏返してのせ、さらに壺も裏返しに被せている。骨は、小皿の上から小量検出された。

6号墓

4号墓の西側40cmの場所から検出された火葬墓である。大きさは、東西28cm、南北約25cmの済円形掘方のピットである。ピット内から土師器壺（16）と小皿（3）が出土した。置き方は、小皿を底に置きもう一枚の小皿を裏返してのせているようである。また、その上から壺を裏返して被せている。骨は、上方の小皿の上から小量出土した。

7号墓

6号墓の西側に隣接して検出した火葬墓である。掘方は両者掘方が切り合いを持つがわずかであったので前後関係を明確にしえなかった。大きさは、東西28cm、南北約25cmの済円形掘方ピットである。ピット内から土師器壺（17）と大皿（7）、杯（11）が出土した。底部に大皿と杯を裏返して置き、その上に壺を被せている。骨は、杯の上方から小量出土した。

第2トレンチ

第2トレンチは、体1トレンチの南側に横幅1.5m、長さ15mの規模で設定した。トレンチの東側で古墳の墳丘と周溝の一部が検出された。墳丘は、表土（約20cm厚さ）下に、茶褐色粘質土（5層）、灰褐色粘質土（6層）を確認した。周溝の埋土は、茶灰色砂質土（2層）、黄褐色粘質土（3層）、黄灰色粘質土（4層）である。第4層から埴輪と土師器片が出土している。この古墳と直接関係ある遺物が不明である。古墳は、現地形からわずかにその痕跡が見い出さ

れ、墳丘径10m弱を測る。トレンチの西側は、古墳の埴丘部の土砂の流出した土層のように考えられる。遺物は、埴輪や土師器の細片が1、7層から出土している。

第3、4トレンチ

第1、2トレンチの西側にそれぞれ横幅1.5m、長さ7.5、4.5mの規模のトレンチを設定した。これらのトレンチは、斜面が急な所にあり、流出したと考えられる遺物は確認したもの。遺構は検出されなかった。

出土遺物

出土遺物は、古墳時代から中世にかけての埴輪、土師器、須恵器、磁器、人骨等が出土した。

埴輪は、最終期の時期が考えられる粗雑な作りのものが少量出土した。土師器は、小皿（1～5）と大皿（7～9）、杯（6、10～12）、甕（13～19）がある。小皿は、口径9.9～11.3cm、器高1.0～1.9cmを測る。形態は、口縁端部を内側に小さく屈曲させたものである。色調は、灰白色から黄白色のもので、胎土は、石英、長石、くさり礫等を含むが割合精良なものが多い。大皿は、小皿の口縁端部とよく似た形態を成し、口径13.0～13.4cm、器高2.3～2.5cmを測る。色調と胎土は、灰茶色で石英、長石、金雲母、くさり礫を少量含むが精良な粘土を使用している。調整は、内外面ナデ調整であるが、外面に指押さえ痕が顕著に違るもの、内面を板ナデしているものが認められる。杯は、高台の付かないもの（6、10）と付くもの（11、12）がある。大小皿より器壁が厚く6mm前後である。6は、体部が円弧状を成し、内面を平滑に仕上げている。色調は、明茶灰色、胎土は石英、長石他の砂粒をやや含む。10は、外面に指押さえ痕が顕著にみられる。11は、口縁端部がわずかに外反している。内面黒色土器である。12は、口縁端部が大きく外反する。器高が偏平で大きな高台を付ける。

甕は、口縁部のみで遺存して底部が不明である。端部は、短く直立するか外反する。口径は、13.3～17.7cmを測る。色調と胎土は、明黄橙色で石英や長石の砂粒をやや多く含む。外面は、板ナデ又はナデ調整である。内面は、ヘラ削り又は板ナデ調整である。

須恵器は、杯（20～22）、壺（23～25）がある。20の口縁端部内側にわずかな段がある。25は、口縁端部のみ欠損してほぼ完形である。肩部はやや上方で張っている。体部下方に底部から2cm位までの間は回転ヘラ削りをしている。

今回の調査は、事前の試掘調査として実施したもので、古墳時代後期の古墳と10～11世紀の火葬墓群が検出された。各遺構とも遺存状態がよくないが、多くの遺物を伴っており、この地を墓域として使用した集団がどこに居住していたのか、また、その初源と終焉は何時頃なのか多くの課題が生まれた。現在は、試掘調査結果を鑑みて当初計画の一部変更を申請者に依頼して現状のまま置かれている。

88-3次調査

- ・調査地区所在地 柏原市片山町222-2
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 1988年5月9日～5月10日
- ・調査面積 $12\text{m}^2 / 207.9\text{m}^2$

当調査区は、片山神社の北方に接して、玉手山丘陵の最先端に位置している。眼下には、石川と大和川の合流地点が見渡せ、西側に衣縫廃寺がある国府遺跡と東側に河内國分寺や國分尼寺がある。片山神社内には、白鳳時代創建の片山廃寺がある。昭和57年4月柏原市教育委員会が実施した調査で塔跡を検出した。他の主要建物は未確認である。

調査は、 $1 \times 2.5\text{m}$ 、 $1.5 \times 3\text{m}$ 、 $1 \times 4\text{m}$ のトレンチを設定した。第2、3トレンチは、上層が旧家屋によって削平を受けたと考えられ、表土(10~20)除去後に直ぐ地山に達した。第1トレンチは西向きの急斜面となっている。層位は、上層より、表土(1層)、黄茶灰色粘質土(3層)、黄茶褐色粘質土(4層)、黄灰色粘質土(5層)である。3層は、非常に沢山の瓦が含まれていた。東側で10cmと薄いが西側に30cmと厚くなっている。4層は、トレンチの東端から西側下方に向けて厚く約20cmを測る。この土層から埴輪が多量に出土した。流れ込んだものではなく人為的な所作が感じられる。5層は、無遺物層で地山の流出土であろう。

これらの事から、当地区の画期は2回以上を数えると考えられる。第1回目は、古墳時代中期に埴輪を持つ古墳が築造された事である。これまでの調査及び表探遺物として、三角板銘留短甲形埴輪や家型埴輪、馬形埴輪等の形象埴輪の他、径40~50cmを測るものから径20cm位の円筒埴輪が多数出土している。玉手山丘陵の先端部分は、5世紀中頃から6世紀前葉までの時期の古墳が多数築造されていたと考えられる。これらの古墳がどのような意図のもとに壊されたか定かでないが、白鳳時代創建の片山廃寺が2つの大きな画期として建立される。この片山廃寺も廃

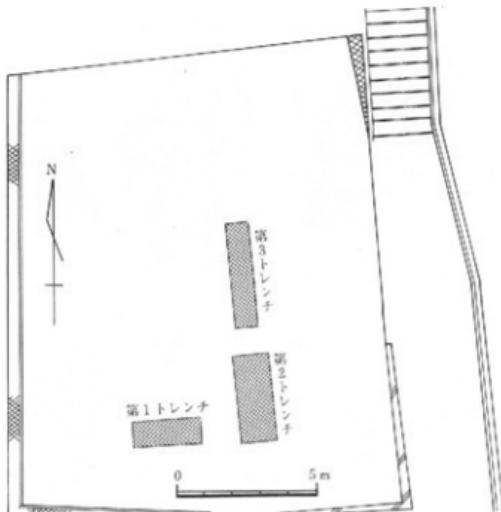


図-20 調査区位置図

絶が明確でないが、中世頃には倒壊していたと考えられる。当調査区で瓦が多量に出土した事は、その寺域及び御籠配置を考える上で重要な示唆を与えるものであろう。

出土遺物

埴輪は、家形埴輪、朝顔形埴輪、円筒埴輪がある。1は、家形埴輪の隅の一部である。屋根との取り付け粘土が遺存している。また、各方面に窓と考えられる方形の透し孔がある。橙黄色を呈しやや軟質の焼成である。2は、同じく家形埴輪の下層部分である。上下面には、方形透し、下方上円形透しがある。

瓦は、平丸瓦が出土した。平瓦は、繩目叩きを主とした種類のものが出土している。繩目の叩き板痕のあるもの（1）、繩目叩き板を交錯させたもの（2）、荒い繩目叩きを施したもの（3、4）、繩目叩き後すり消しを行っているもの（5、6）がある。1、2、5、6は、桶巻作りで3と4が一枚作りである。4以外須恵質に堅緻に焼成されている。凹面の布目は、3が11~13本（1cm）の他7、8本である。

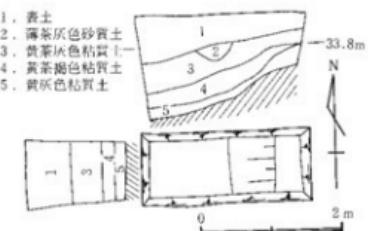


図-21 第1トレンチ平面図・断面図

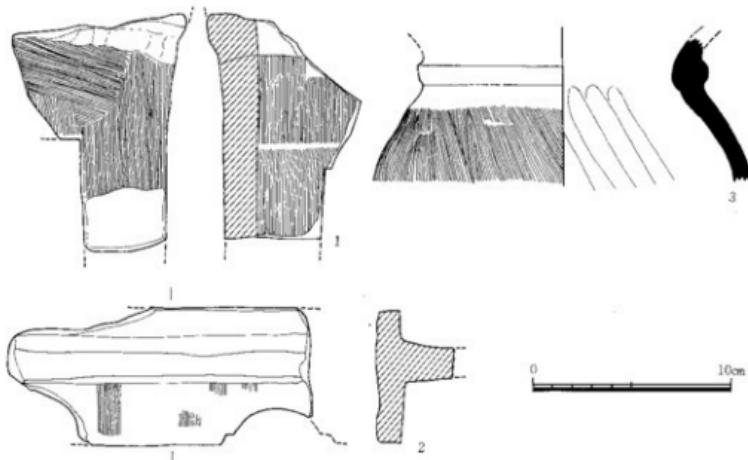


図-22 出土遺物（埴輪）

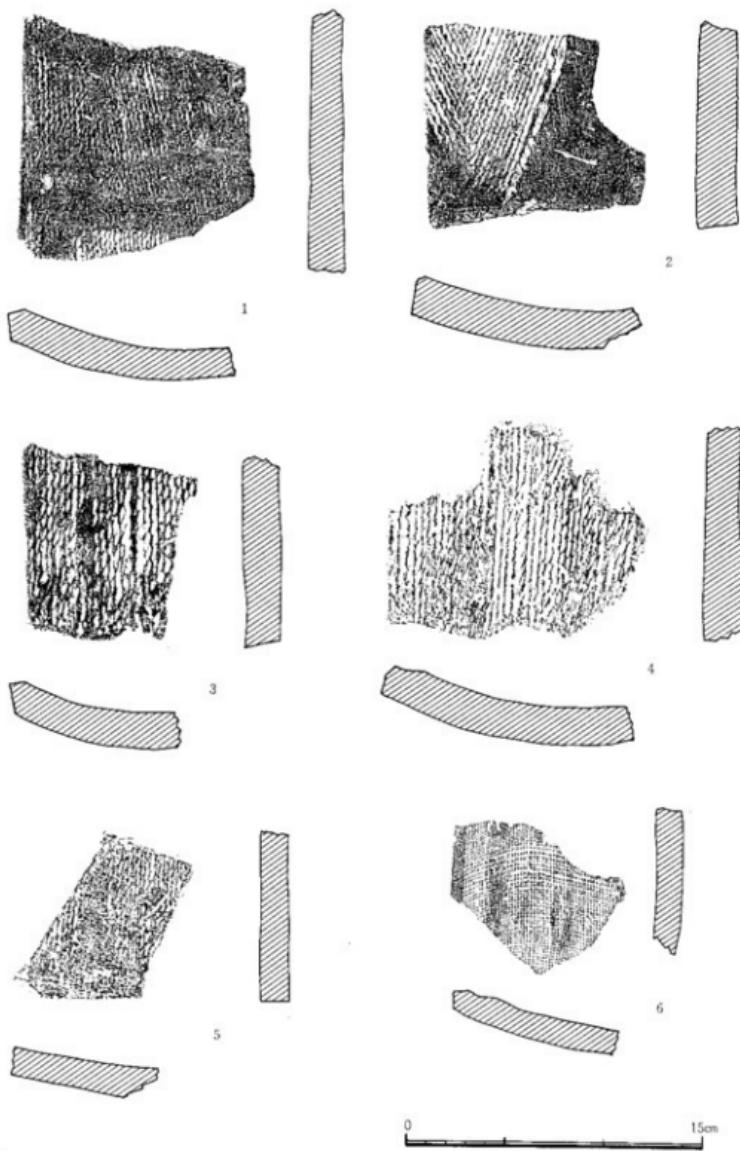


図-23 出土造物（瓦）

88-8次調査

- ・調査地区所在地 柏原市旭ヶ丘1丁目242-8
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 1988年8月9日～8月11日
- ・調査面積 4.5m²/651.1m²

当調査区は、玉手山7号墳から西方に伸びた尾根筋のやや北側にある。その距離は、160mである。当地区は、これまでの調査で構造や遺物は発見されていなかつたが、集落遺跡が存在する事が明らかになつたので報告しておきたい。

調査は、個人住宅の木造建築に際して実施したものである。当初重機による試掘調査を実施する準備を進めていたが、道路が狭く建築時に隣家の敷地を通行する話し合いも出来ていたけれど遺跡の存在が発見される可能性が少ないので人の掘削によって実施した。トレーナーを調査区中央部に設定した。規模は、東西方向3.3m南北方向1.5mである。

層序は、盛土及び旧表土（1～3層）、灰黒色砂質土（4層）、灰褐色砂質土（5層）、灰茶色粘質土（7層）、茶褐色粘質土（8層）、茶褐色粘質土（9層）、黄褐色粘質土（10層）である。1～3層は、厚さ約1mを測り全体に認められた。周辺部の開発時に造成盛土が成されている。4層は、造成前の耕作土の床土である。5層は、約50cmの厚さの水分を多く含んだ土層である。この土層まではほとんど遺物を含んでいない。7層は、約15cmの厚さがあり、小破片の遺物が出土した。8層は、10～45cmの厚さがあり、南から北に向かって傾いている。割合多

くの遺物を含んでいる。9層は、非鉄金属物質を多く含む土層で少量の遺物を含む。10層は、当地域の地山と考えられる。

遺物は、土師器と須恵器がコンテナ1箱分出土した。土師器は、遺存状態が悪く時期を明確にするものはないが、須恵器は、甕、鉢等があり7世紀から8世紀にかけての遺物である。玉手山丘陵東麓には、同時期の集落が連続と続いているのである。

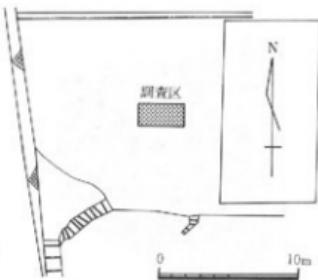


図-24 調査区位置図

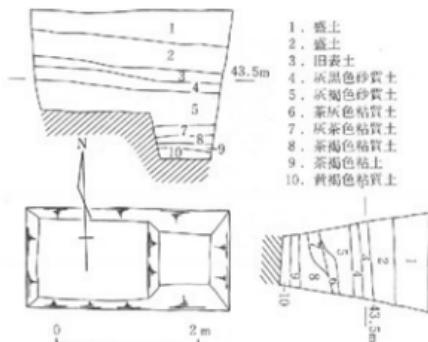


図-25 トレーナー平面図・断面図

第5章 田辺遺跡

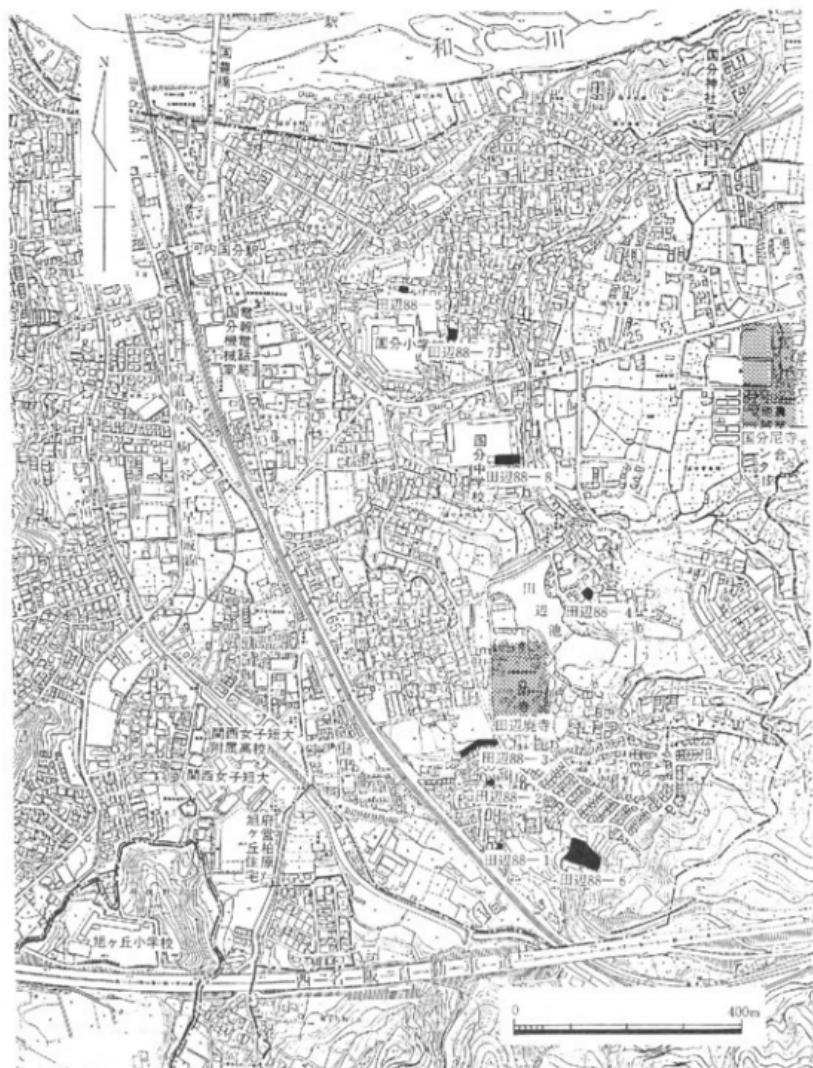


図-26 田辺遺跡調査地位置図

88-1 次調査

- ・調査地区所在地 柏原市田辺2丁目5-9
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 1988年2月17日～2月20日
- ・調査面積 $30\text{m}^2 / 103.7\text{m}^2$

当調査区は、田辺遺跡の南側にあたり、低丘陵上の尾根南緩斜面地である。北側へ約200mの場所に史跡田辺廃寺がある。田辺廃寺は、「田辺史」によって建立された白鳳時代創建の氏寺である。また、その周辺一帯には、井戸や建物址等の遺構が多数検出されており、古代寺院を建立する氏族の規模や財力が伺い知れるのである。また、田辺池を挟んで東側の丘陵上には飛鳥時代から奈良時代にかけての墓域があり、古墳から火葬墓へ変遷がたどれる遺構が発見されている。氏名の明確となっている古代寺院を中心として、その集落や墓域がこれ程関連性が強く結ばれた遺跡も数少ない事例である。

調査は、住宅建築によって破壊を受ける位置に東西方向5.6m、南北方向8.0mのトレンチを設定して実施した。層位は、旧家屋の堆土を除去すると直ぐ黄褐色粘質土の地山に達した。部分的に黄茶灰色粘質土の遺物包含層があるので、削平がかなり進行していると考えられる。

検出した遺構は、トレンチ内に7つの方形掘方を持つ柱穴がある。それぞれ建物を構成するピットと考えられる。北側からピット1～7とした。

建物1、ピット1、2、4、5で構成する。掘方規模は、60～80cmを測り、柱穴径は、23～28cmである。建物全体は、調査区外へ伸びているため明らかでない。ピット4の以北は、平担地となっており、以南は傾斜角度約5度の斜面地となっている事から、同ピットが建物1の南西隅の柱穴であると考えられる。各ピットの柱穴間は、2.0～2.1mの間隔がある。各ピットの掘方埋土は、黄茶灰色粘質土である。柱穴埋土は、掘方埋土にやや黒灰色が混ざっている。柱穴底部は、各ピットとも同一で

37.6mラインである。

建物では、ピット3、6、7で構成する。この建物も規模が明らかでない。各ピットとも遺存状態が悪く8～15cm程度である。掘方規模は、60～80cmである。柱穴径は、25～28cmを測る。ピット3と6、6と7の柱間隔は、2.4、2.9mを測る。

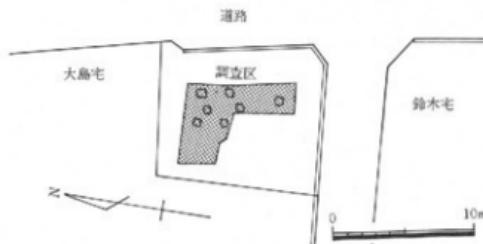


図-27 調査区位置図

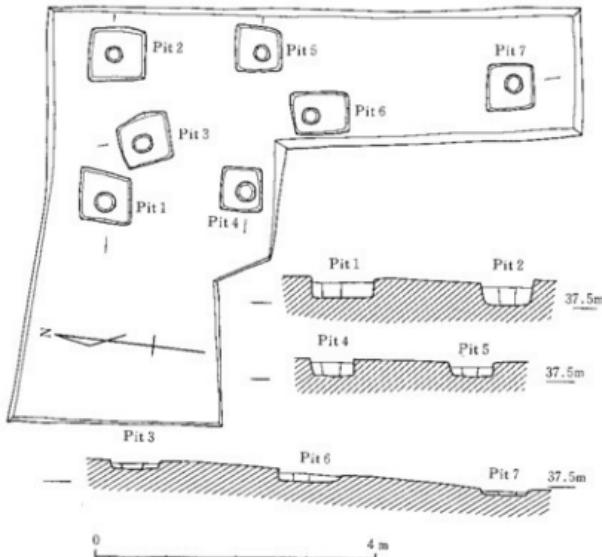


図-28 遺構平面図

建物1と2が重複しており、どちらかが廃絶後に建てられているのであるが、出土遺物もなく明確に出来ない。しかし、ピット1と3の柱穴底部を比較すると前者が後者より10cm深い。また、建物2が斜面地にあるのに対して建物1がより安定した場所である。これらの事を参考に推論すれば、建物1が建てられた何年か後新たに建替えが必要となり、これまでの敷地では新建物の配置や規模の点で困難な状況になったのではないかと考えられる。よって斜面地を含めた敷地の拡大が成されたのだろう。柱穴底部が浅い理由は、当調査区が尾根筋から約60m南下した場所で比高差4mあるので土砂の堆積が多く見られたのであろう。

88-2次調査

- ・調査地区所在地 柏原市田辺2丁目1231-10
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 1988年3月2日～3月5日
- ・調査面積 20m²/158.6m²

当調査区は、国史跡田辺廃寺の南西約100mの谷1つ隔てた丘陵上において個人住宅建築のための事前の調査として行ったものである。

立地は、二上山系から流れ出る原川と大和川の合流地点のやや上流の東岸にあたる東西方向に伸びる低い丘陵上に位置する。

当該地は、現在平坦地となっているが、東側方向へは上り、北側方向へは下りの傾斜地となっている。よって、東側部分は削平を受け北側部分は盛土となっているようである。地形を勘案して、中央部に東西方向6.4m、南北方向3.2mの規模のトレンチを設定した。

東半部は、旧家屋又はそれ以前の削平によって現地表下直ぐ地山となる。造構は検出されなかった。

西半部は、表土下10cmで溝と土塙を検出した。溝—1は、南北方向に真っ直ぐ伸びた小さな溝である。溝の両端は、トレンチ外へそのまま続いている。規模は、現長3.2m、横幅0.6m、深

さ約0.35mである。埋土は、茶灰色粘質土で、遺物が出土しなかった。時期は、土塙—1が埋没した後に掘削したものであるので、14、15世紀以降の溝である。

土塙—1は、トレンチ西側全面に検出しただらりとした傾斜の落ち込みである。大きさは、トレンチ内ではほぼ半分と考えられる。東西方向約2.6m、南北方向2.4m以上、深さ、約1.1mである。埋土は、6層に分層出来る。第1層は、茶褐色砂質土、第2層茶灰色粘質土、第3層茶褐色粘質土、第4層茶灰色砂質土、第5層黄褐色粘質土、第6層茶黃灰色粘質土である。第4、6層から多数の礫が出土した。礫が出土した場所は、土塙の中央部と



図-29 調査区位置図

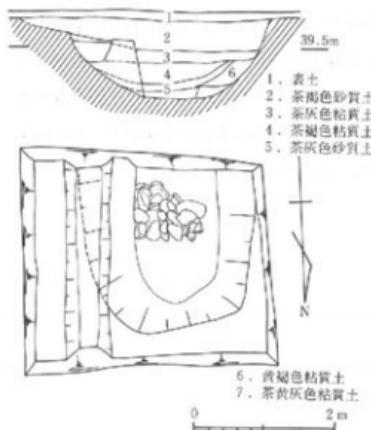


図-30 造構平面図・断面図

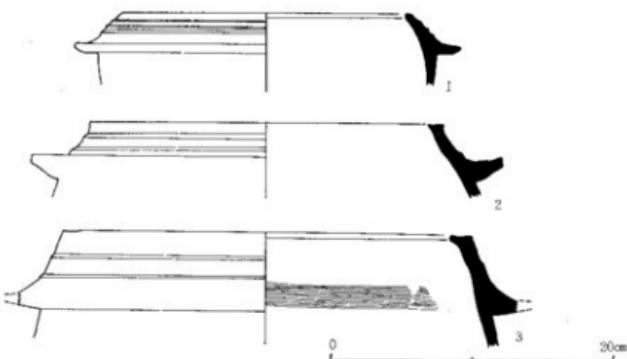


図-31 出土遺物実測図

考えられ、廃棄したものが円弧状の底部に集積した状態である。礫の大きさは、径10~40cmである。遺物は、第2層より下方の土層から瓦質の羽釜、擂鉢、甕等が少量出土した。大部分は、礫を含む第4、6層からである。土塙の埋没は状況から割合早い期間と考えられる。溝—1は、土塙が埋没した後掘削されたものである。

出土遺物は、瓦質の羽釜、擂鉢、甕、土師質甕、サヌカイト剝片等が少量出土した。図示した瓦質の羽釜は、土塙—1下層から出土したものである。

1は、瓦質の羽釜である。口縁部は、内湾して折れ曲がり端部が丸く終わっている。口縁外面に形骸化した3つの段があり、鋸部はほぼ水平方向に小さく伸びる。内外面に使用痕を示す煤が付着する。口径は、20.6cm。色調は、白灰色を呈し、胎土は、石英や長石等の砂粒を少し含んでいる。内面の調整は、横方向の板ナデである。

2は、瓦質の羽釜である。口縁部は、内側に真っ直ぐ伸び、口縁端部が水平方向に平坦となっている。口縁部外面に2つのわずかな高さの段がある。鋸は上方へ向けて伸び、端部も方形に終わっている。口径22.9cm。色調は、白灰色、胎土は、小砂粒を多く含む。調整は、内面を横方向の板ナデ、鋸の下部はヘラ削りである。

3は、瓦質の羽釜である。口縁部は、内傾して、端部が水平方向の平坦面を持ち内端が内側に引き伸ばされている。外面は小さな段が2条みられる。鋸は、水平方向に伸びるが端部を欠損している。口径は、28.8cmである。色調は、白灰色、胎土は、多くの砂粒を含んでいる。調整は、内面を横方向の板ナデ、鋸の下部をヘラ削りしている。

88-4次調査

- ・調査地区所在地 柏原市国分本町7丁目1965-16
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 1988年7月4日～7月9日
- ・調査面積 $60\text{m}^2 / 165.3\text{m}^2$

当調査区は、田辺古墳群及び古墓群と同じ丘陵の北西方向へ約200mの位置にある。谷を隔てて南西に100mに田辺廃寺がある。これまでに当調査区の西側隣接地で古墳時代後期の堅穴住居、奈良時代の土塙や溝、中世の掘立柱建物等が検出されている。

調査は、敷地内に東西方向9.0m、南北方向5.2mのトレンチを設定して調査を実施した。層序は耕作土で（1層）、灰黄色砂質土（2層）、黄褐色粘質土（3層）である。1層は、ぶどう畠の耕作土で5～20cmの厚さである。2層は、5～16cmの厚さを測る遺物包含層である。この土

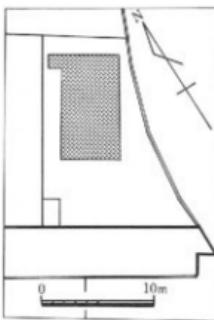


図-32 調査区位置図

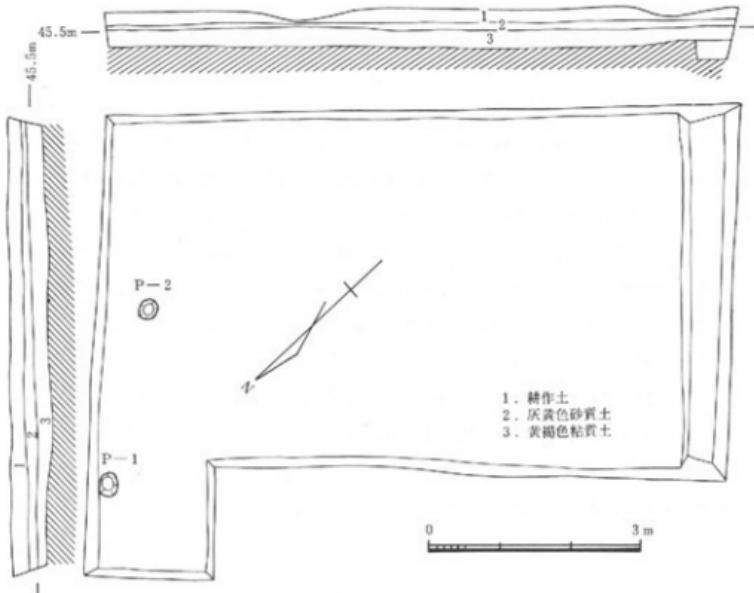


図-33 調査区平面図・断面図

層除去後に調査区の北側部で2つの円形ピットを検出した。ピット1は、規模28~35cm深さ14cmを測る。埋土は、薄茶灰色砂質土である。ピット2は、25~28cm、深さ8cmである。

当調査区の南側約50mの位置に2基の瓦窯が存在した。今は土取りの為崩壊して認められないが、若干の瓦の採集を行っている。今回報告する遺物は、昭和60年頃瓦窯のある斜面上方の平担地の埋土中から出土したものである。

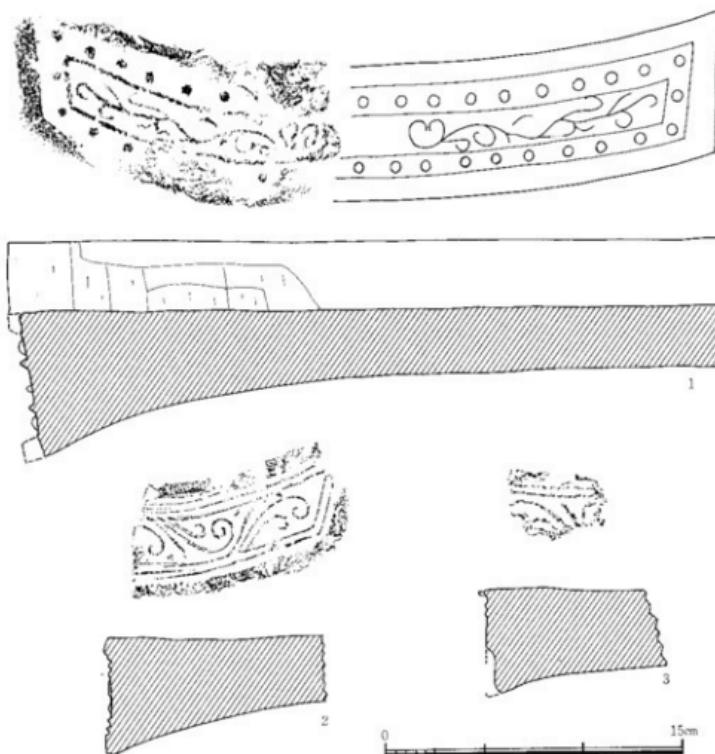


図-34 軒平瓦

第6章 国 分 尼 寺 跡

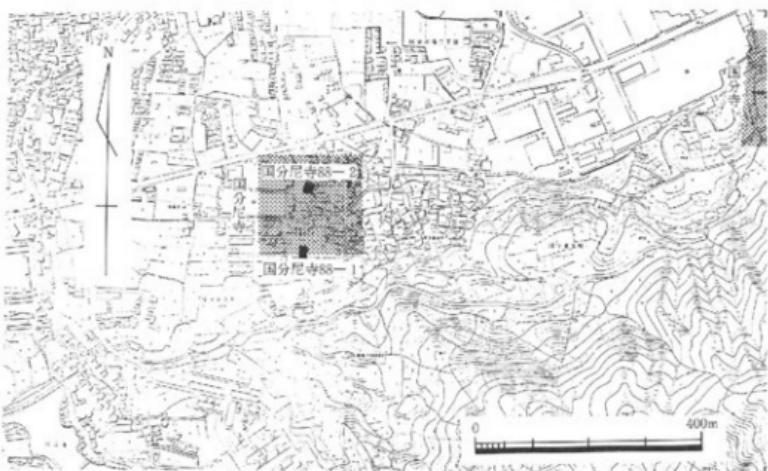


図-35 国分尼寺調査地位図

88-2次調査

- ・調査地区所在地 柏原市国分東条町2567-2
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 1988年9月1日～9月2日
- ・調査面積 $6 \text{ m}^2 / 237 \text{ m}^2$

当調査区は、国道25号線の南側80mのところに位置する。同国道を東側へ約800m行けば、河内国分寺があり、その北側を流れる大和川の対岸には竹原井行宮と考えられる遺跡がある。

河内国分尼寺は、遺構はほとんど確認されておらず、柏原市史によると、地籍名の中に尼寺という名称があることと河内国分寺と同類の平瓦片が採集されている事により周辺一帯が方1町半の範囲で寺域が想定されている。



図-36 調査区位置図

今回の調査は、個人住宅建築に伴う緊急事前の発掘調査である。国道25線から南下した道路に面しており約20~30cm下がった土地である。家屋の建築には道路高と合わせる予定で盛土を施すため、下層の状況を検証するためのトレンチ調査を実施した。

トレンチは、調査区の南側に南北方向1.3m、東西方向4.2mの規模で設定した。

層序は、表土（1層）、茶灰色粘質土（2層）、灰茶色粘質土（3層）、茶褐色砂礫土（4層）である。1層は、現地表下約20cmの厚さでみられる。旧家屋の床面となっており、また、それ以前に利用されていた耕作地の土層である。調査区は、南側から北側へわずかな傾斜を持ち、東側から西側へもわずかに下向している。2層は、耕作土の1層の下の床土状を呈する。厚さは、平均的に10cmを測る。この土層から若干の土師器と瓦の細片が少量出土した。端部が激しく磨耗しており、形状や時期は明確でない。3層は、厚さ30~40cmを測る。土層内には5~10cm大の柔らかい礫が多数入っており、水の含有も多い。同上層は、粘性が強く後世の耕作に水持ちの良い土層となっている。遺物は出土していない。4層は、当地域の地山になると考えられる土層である。3層と同系統の土層で、礫の含有も多い。トレンチ西側端で深く掘り下げたが変化はなかった。

造構は、3層除去後に南北方向の小溝を検出した。溝の北端部だけが見つかり、南側はトレンチ外へ続いている。規模は、幅45cm、深さ27cm、長さ80cmを測る。埋土は、灰茶色粘質土である。埋土中から遺物が出土していないため時期や性格は不明である。

国分尼寺の寺域と考えられる範囲内においてこれまで数次の調査が行われたが、今回の調査も含めて寺院に関わる造構や多量の瓦類の出土は得られてない。複弁蓮華文軒丸瓦が2型式の2個体確認されているのみである。当調査区の地籍名は、尼寺（柏原市史第四巻に詳載）となっており、国分尼寺が建立された事実は確実であろう。さらに調査の必要な遺跡である。

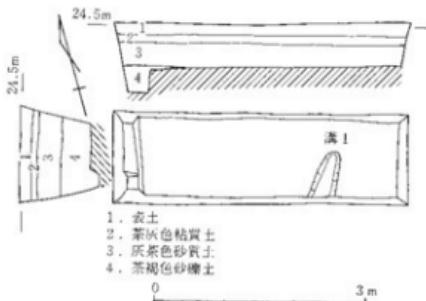


図-37 トレンチ平面図・断面図

図 版



高井田遺跡



玉手山遺跡



松岳山古墳群



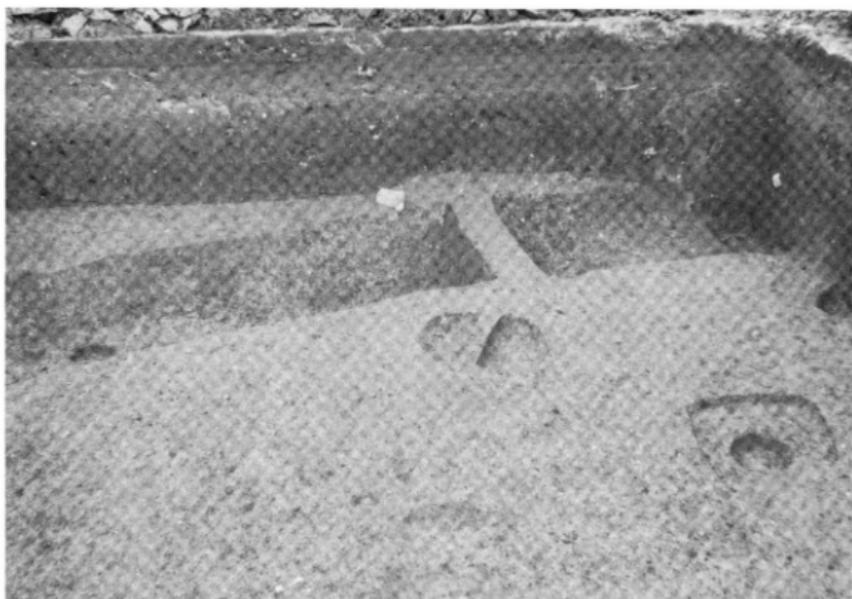
田辺遺跡



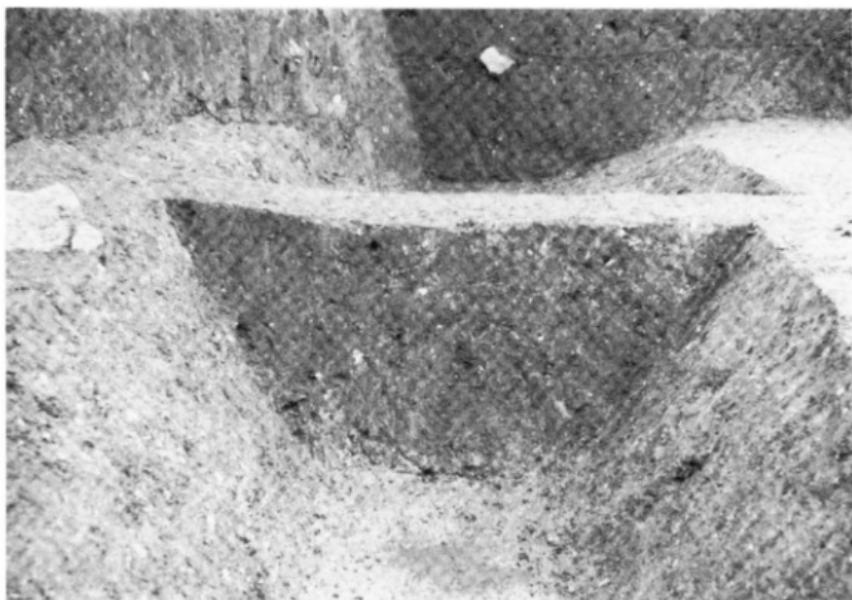
トレンチ全景



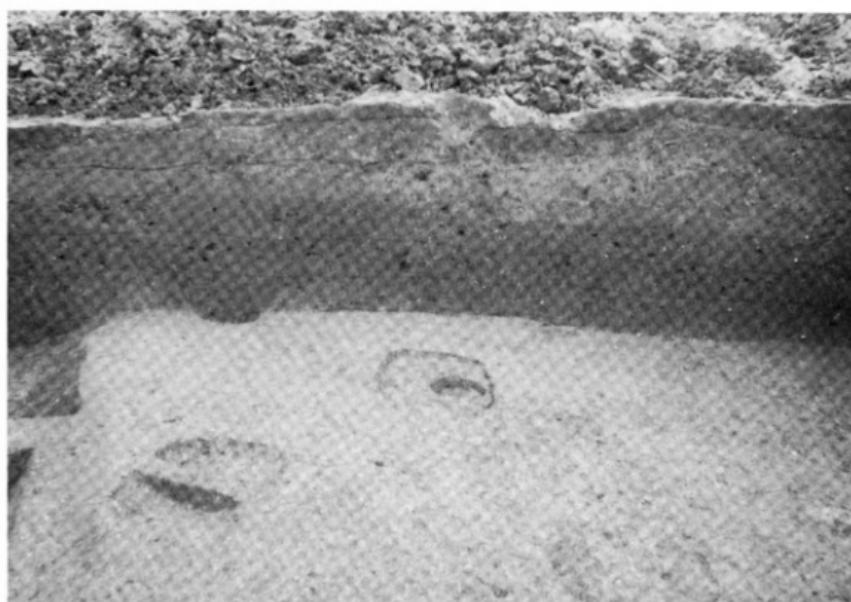
溝-1



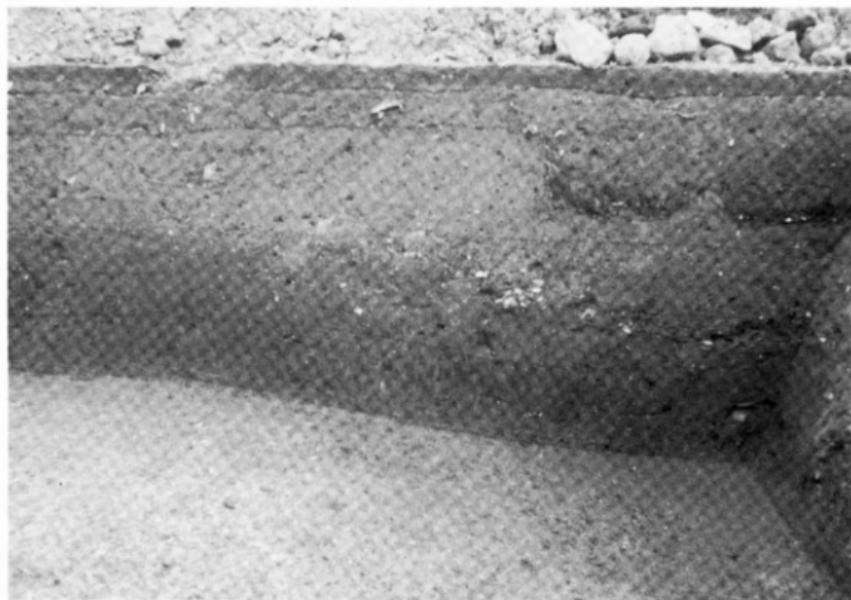
溝一 1



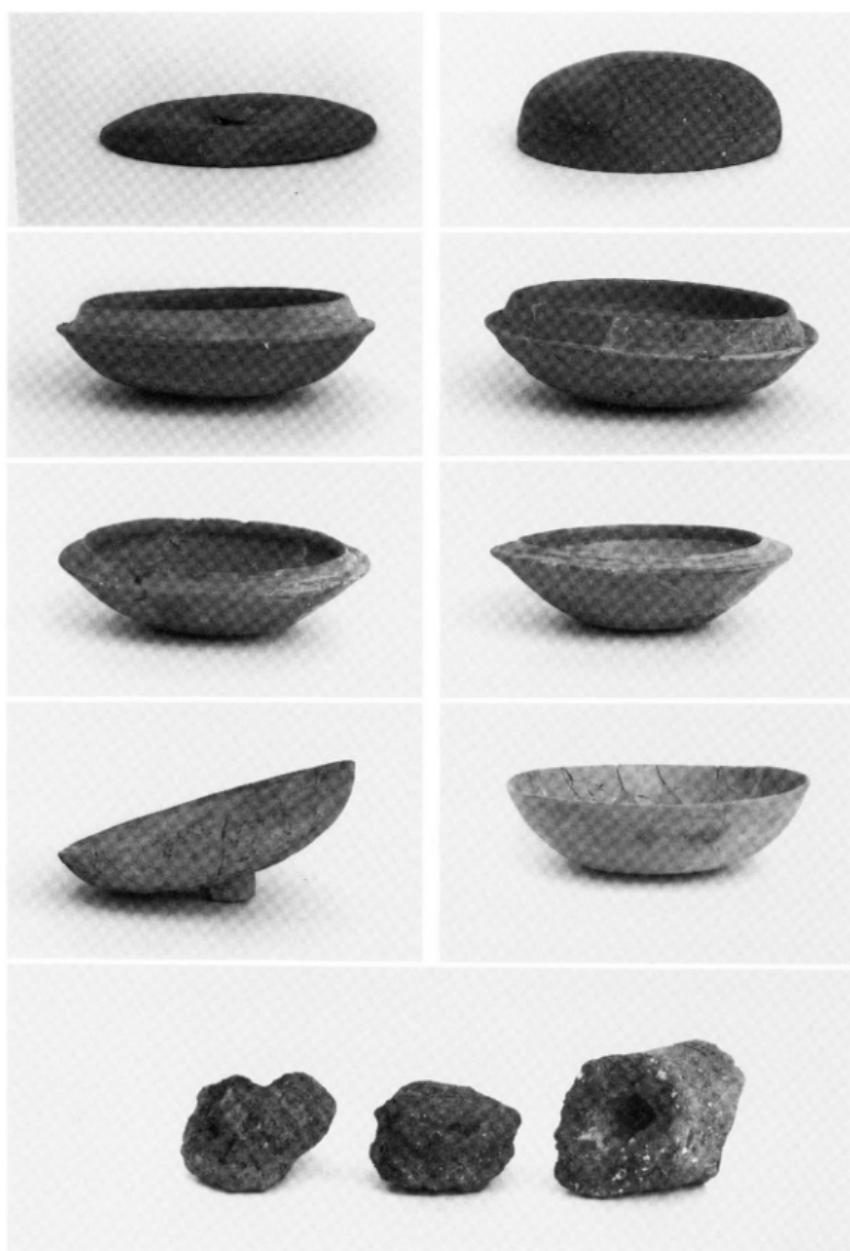
溝一断面



トレンチ南断面



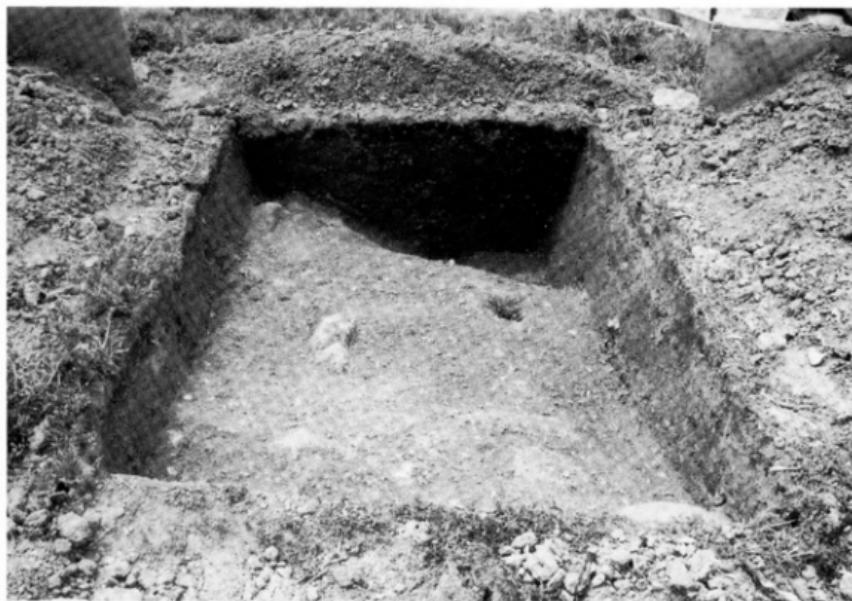
トレンチ西断面



出土遺物



第1トレンチ



第3トレンチ

圖版八
平尾山古墳群(88—6)



調査前



伐採後



第13支群1号墳



同石室



トレンチ断面



トレンチ断面



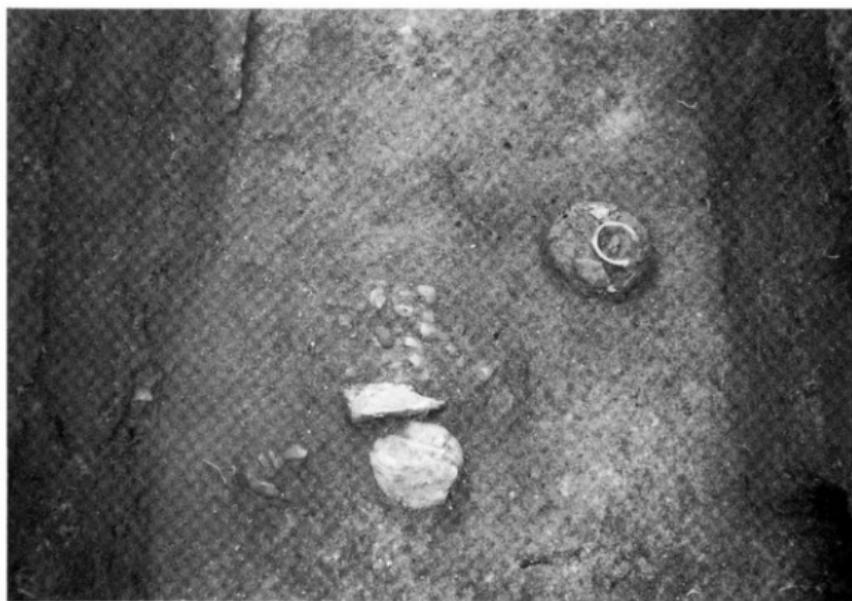
トレンチ全景



トレンチ全景



トレンチ全景

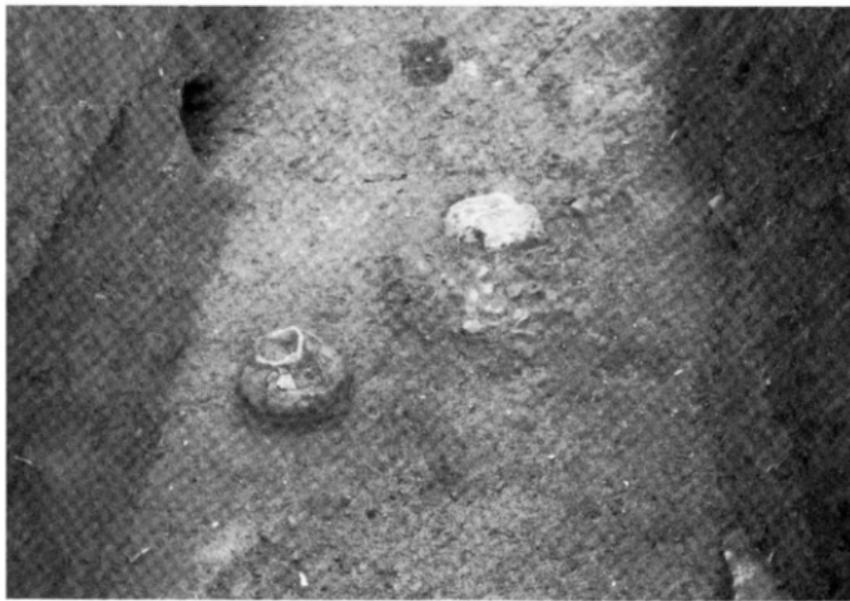


2・3号墓

圖版十三 玉手山遺跡(88—1)



1号墓



2·3号墓

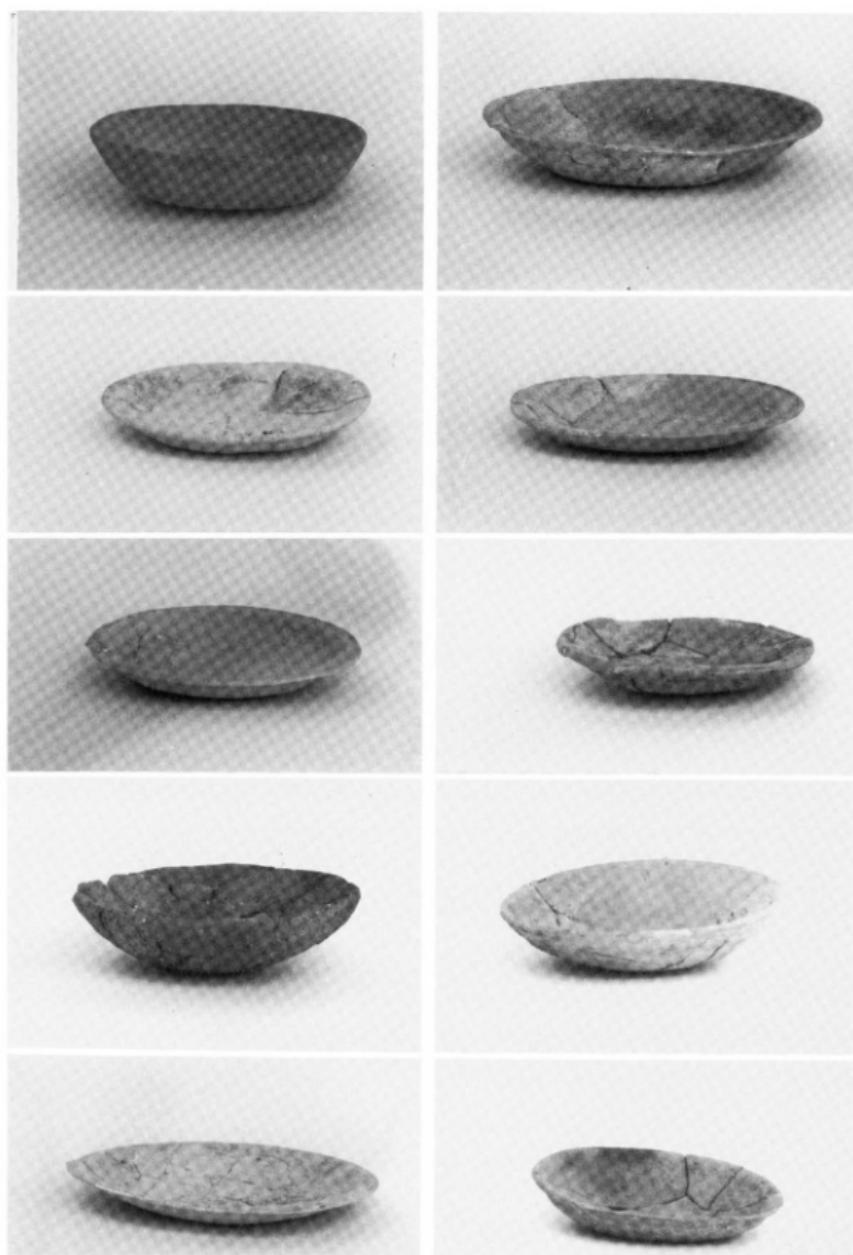
圖版十四 玉手山遺跡(88—1)



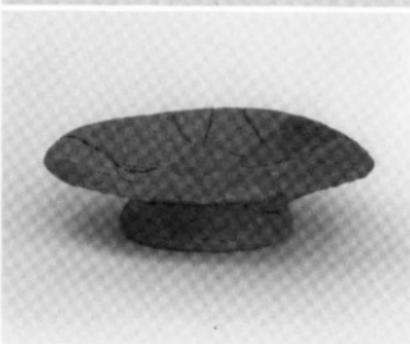
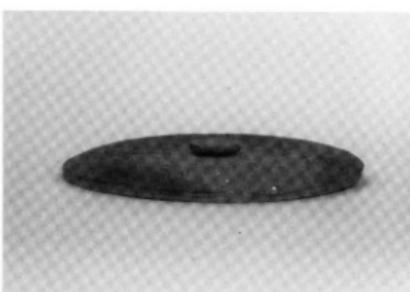
4號墓



5號墓

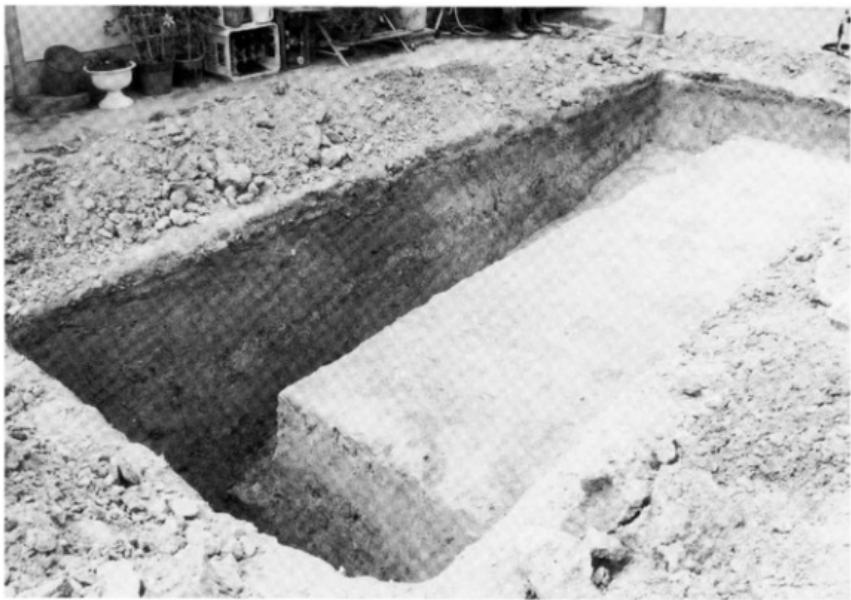


出土遺物





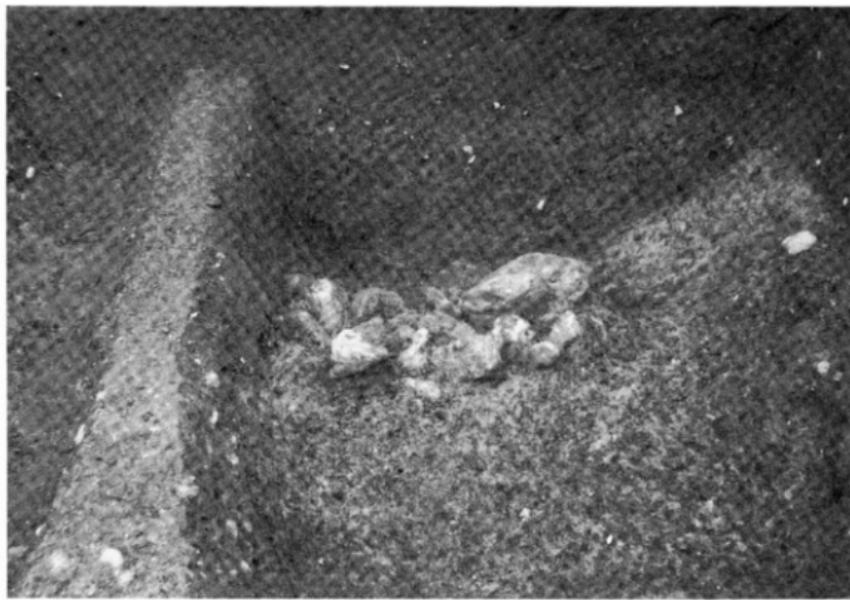
トレンチ全景



トレンチ断面



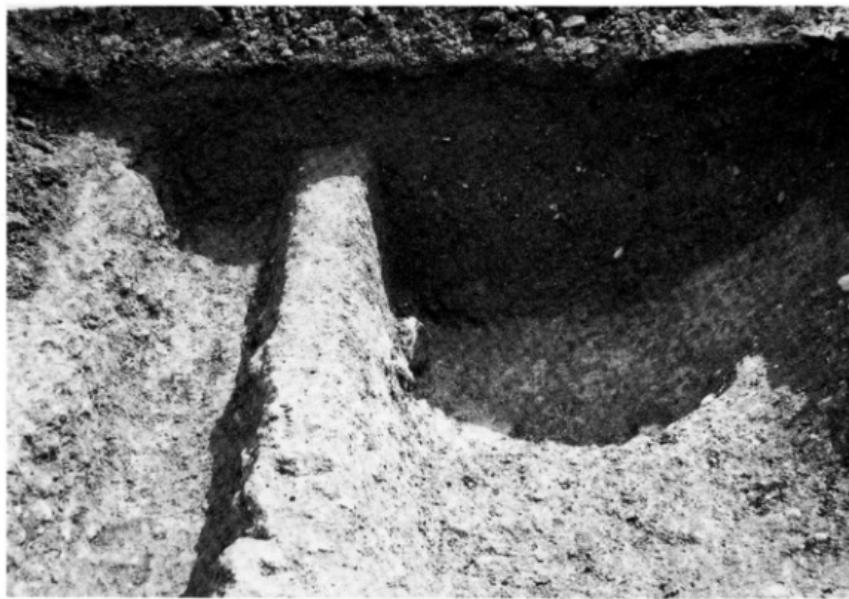
土塙-1



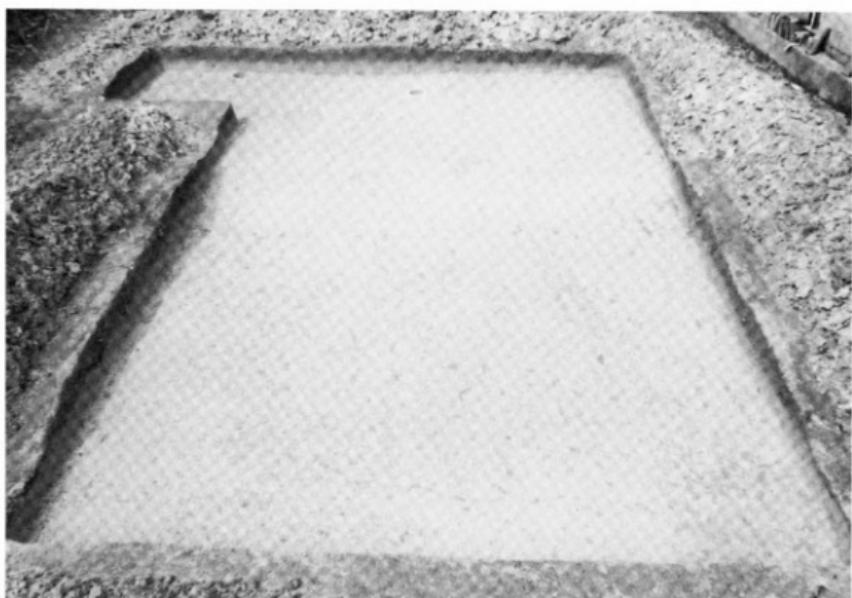
土塙-1



溝一・土塙一



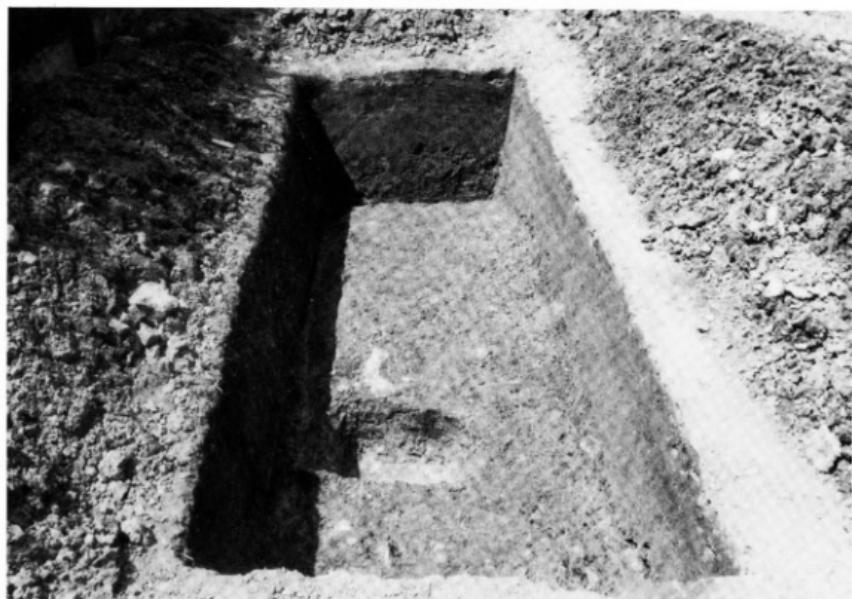
溝一・土塙一



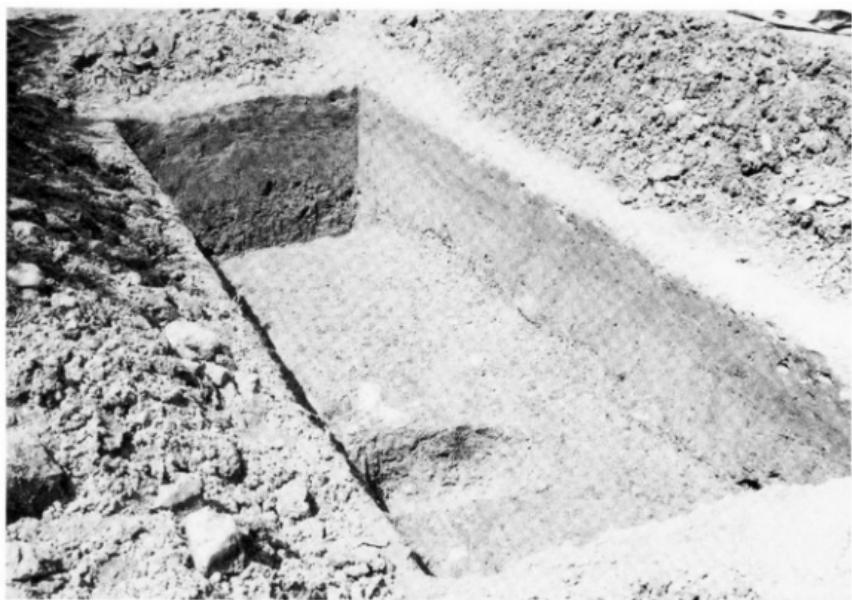
トレンチ全景



トレンチ南側断面



トレンチ全景



トレンチ全景

柏原市埋蔵文化財発掘調査概報

1988年度

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話(0729)72-1501 内5132

発行年月日 平成元年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

